

策定懇話会概要

・雇用創出部会	1
・人の流れ創造部会.....	11
・結婚・出産・子育て部会.....	33
・地域創造・暮らし安心部会.....	47
・合同部会	65
・策定懇話会 総括.....	71

小国町地域創生総合戦略策定懇話会部会

部会		所属	委員		本部員体制
雇用創出部会					
	座長	山形銀行小国支店長	布 施 和 宏	男	(オブザーバー)
	1	小国いきいき街づくり公社	鳶 貫 速 人	男	産業振興課長
	2	農業者	大 谷 健 人	男	地域整備課長
	3	小国町商工会女性部	猪 野 みどり	女	議会事務局長
	4	クアーズテック(株)小国事業所	齋 藤 美 穂	女	
	5	小国町建設業組合	柿 崎 清 隆	男	(事務局) 渡部寿郎
人の流れ創造部会					
	座長	新潟県立大学教授	山 中 知 彦	男	(オブザーバー)
	1	小玉川青年団いちころ 代表	舟 山 和 樹	男	商工観光主幹
	2	旬彩工房	山 口 ひとみ	女	地域振興主幹
	3	古田歌舞伎保存会	安 部 隆 利	男	会計管理者
	4	小国高校生 (2 年)	佐 藤 大 雅	男	
	5	小国高校生 (2 年)	舟 山 玲 奈	女	(事務局) 小野正晴
結婚・出産・子育て部会					
	座長	(有)地域環境デザイン研究所所長	宮 原 博 通	男	(オブザーバー)
	1	すみれ保育園保育士	工 藤 千 穂	女	健康福祉課長
	2	おも白い森	今 絵理子	女	教育次長
	3	小国小学校	河 内 昭	男	町立病院事務長
	4	小国高校生 (2 年)	金 歩 夢	男	
	5	小国高校生 (2 年)	舟 山 咲	女	(事務局) 廣瀬孝徳
地域創造・暮らし安心部会					
	座長	法政大学現代福祉学部 准教授	岡 司 直 也	男	(オブザーバー)
	1	北部地区振興協議会	安 部 茂	男	町民税務課長
	2	グループホーム満天の家 所長	舟 山 靖 恵	女	訪問看護ステーション所長
	3	玉川学校くらぶ 代表	佐 藤 靖 彦	男	建設技術主幹
	4	ここ掘れ話ん和ん探検隊	金 野 やよい	女	
	5	東部地区振興協議会会長	渡 部 正 仁	男	(事務局) 佐藤友春

雇用創出部会

- 第1回 平成27年7月31日（金）1
@おぐに開発総合センター 保健相談室
- 第2回 平成27年8月19日（水）4
@おぐに開発総合センター 研修室
- 第3回 平成27年9月 9日（水）7
@おぐに開発総合センター 研修室

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第1回 雇用創出部会 要旨

- 日 時 平成27年7月31日（金） 18:30～20:30
- 会 場 おぐに開発総合センター 3階 保健相談室
- 出席者 懇話会委員：布施和宏、寫貫速人、大谷健人、猪野みどり、齋藤美穂、柿崎清隆
オブザーバー：舟山議会事務局長
事務局：佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、渡部主任
- 概 要 講師紹介、自己紹介に続き、事務局より会議開催趣旨とまちづくりの基本的な考え方等について説明した後、布施委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

布施委員より、総合計画にしばられず、具体的に「こうしたら雇用が創出できる」ということを自由な発想で述べてほしいとの発言。各委員より、以下のような発案があった。

- ・ ウイスキー工場を建て、おぐにブランドとして販売し雇用を生む。
ワイナリーは県内に12箇所ある。酒蔵もたくさんあるが、ウイスキーはない。
- ・ これだけおいしい水があるので、水の産業を興す。
コバレントでは一時期、飯豊町から飲用水を買っていた。
高額な浄水器がよく売れている。需要はあるはず。
農業分野でも期待。ご飯の味は水で変わるので、水と米をセットで売る等が可能。
- ・ 農家が夏に農業、冬に除雪に従事。安定収入を確保。
除雪は雇用吸収力ある。
新規就農者向けの「アグリスタータキット」として有効。
- ・ 米以外の核になる畑作物を作る。
学校給食向けのたまねぎ等に取り組んでいる。
かつてケールに取り組んだことがあるが、販路確保が難しかった。
花卉は近年、新たな栽培方法の登場で値崩れ。暖房費を克服できれば有望。
- ・ 子供が遊べるようなアスレチックやクライミングウォールなどを作る。
りふれやオートキャンプ場などの施設と連携して使える。
「ふなばしアンデルセン公園」のように外から人を呼び込んでいる例もある。
廃校を丸ごとアスレチックにするのも面白い。雨天時や冬季にも使える。
- ・ 廃校施設を再利用する。
老人ホームやグループホーム等に再利用できないか。
- ・ 山をくり抜いて大きい広場を作る。冬季は多目的広場、遊び場に。夏は農作物の保管に。
雪室として利用すれば付加価値が付きより売れる。冷房、加湿の電気代もかからない。
サンダーバード等の秘密基地は山の中と決まっている。

- ・クアーズとコラボで地ビールを作る。
実現すればクアーズ初の日本拠点。地ビールビジネスのノウハウ獲得にもなるはず。
クアーズテックの社長が来た際に地ビール開発をお願いしてはどうか。
ビールに「コバレント」の名前を残す。
- ・航空ビジネスやロケットビジネスを誘致する。
打上場、実験場を併設しても騒音や事故のリスクを避けられる。
- ・森を活用してバイオマス発電を行なう。
- ・より質の高い水を得るために森を管理する。
- ・漢方薬などの高付加価値作物を栽培する。漢方料理や薬膳料理を食べさせる店を開く。
小国には他の農地と隔離され、水が混じらない有機栽培に向いた環境が多い。
県内でよく食べられている「ひょう」も漢方薬になる。
- ・山菜を売り出せるルートを作る。
サプリメント化はどうか。
- ・特産品を食べさせるレストランを開く。
雑穀だけなら他地区でもあるが、雑穀・地鶏・みそのオール小国でやれば面白い。
地鶏はラーメン用の鶏ガラの消費量に対して肉が伸びない。
- ・施設が奥まったところにあり行きにくい。
奥まった場所には景観の良いところが多い。周回できれば観光で雇用が創出できる。
- ・名所がほしい。現状では仙台、山形と新潟との通過点でしかない。
多くの町外者にとって、小国のイメージは「熊」と「雪」しかない。
逆に、小国に入ったら「熊出没注意」の旗がたくさん立っているというのはどうか。
- ・スキー場に花を植える、トレッキングコースを作るなど、夏の利用を考えてみる。
- ・観光地整備専門の開発会社を作る。
- ・町で工場を建て、企業に安く貸して工場を誘致する。
地震に強い。台風被害も少ない。
除雪にコストがかかるが、雪で冷房するシステムを作れば逆に強みになる。
水がきれいで、精密工業に向く。
- ・ウイスキー、ビール等の原料（麦、トウモロコシ、水）を町の農業で安定供給する。
原料となる農作物の価格が安定する。ただし麦は雪との関係で栽培が困難か。
今回はこれらを既存産業との関係や新規性、実現可能性などの視点から検証し、提案の方向性を見出すこととした。

○その他 第2回部会を8月19日、第3回部会を9月9日とした。

<黒板メモ>

「こういうことをやったら雇用が生まれる！」

- ・ ウイスキー工場を建てる。
- ・ 水の産業を興す。←浄水器がよく売れる。
↑
農業分野でも期待。(水と米をセットで売る 等)
- ・ 農家が夏に農業、冬に除雪に従事。安定収入を確保。←アグリスタータキット
↑雇用吸収力ある
- ・ 米以外の核になる畑作物を作る。
↑
ケール
- ・ 子供が遊べるようなアスレチック等を作る。(りふれ等の近くに)
↑
「アンデルセン公園」の例、クライミングなど
- ・ 廃校施設を利用 (高齢者施設、学校まるごとアスレチックに 等)
- ・ 山をくり抜いて広場→農作物の保管、サンダーバード等の秘密基地は山の中になる！
↑
より売れる⇒雇用
- ・ クアーズとコラボで地ビール (小国コバレントビール) ←クアーズ初の日本拠点
- ・ 航空・宇宙産業を誘致 (音、事故を気にしなくて良い)
- ・ 森を活用してバイオマス
- ・ 森を管理してより良い水
- ・ 漢方薬の栽培←小国は有機栽培しやすい (ひょう)
- ・ 山菜を売り出せるルート←サプリメント化
- ・ 特産品を食べさせるレストラン
雑穀+地鶏+みそ・・・オール小国
- ・ 施設が奥まったところにある、1周できれば・・・
- ・ 名所がほしい。通過点でしかない。
↑
小国のイメージは熊と雪
⇒逆に、小国に入ったら「熊注意」の旗
- ・ スキー場の夏の利用 (花を植える、トレッキング)
- ・ 観光地整備専門の会社を作る。
- ・ 工場を誘致する。(町で工場を建てて貸す。)
↑
地震に強い。台風被害も少ない。
除雪にコストがかかる⇒雪で冷房
- ・ ウイスキー、ビール等の原料 (麦、トウモロコシ、水) を安定供給
⇒価格も安定

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第2回 雇用創出部会 要旨

- **日 時** 平成27年8月19日（水） 18:30～20:30
- **会 場** おぐに開発総合センター 2階 研修室
- **出席者** 懇話会委員：布施和宏、寫貫速人、大谷健人、猪野みどり、齋藤美穂、柿崎清隆
オブザーバー：井上地域整備課長
事務局：佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、廣瀬主任、渡部主任
- **配布資料** ・総合戦略における基本的方針と基本的な方向
・総合戦略・過疎地域自立促進計画 各施策等の整理
・小国町地域創生総合戦略住民意識アンケート調査の実施状況
・第1回雇用創出部会要旨
- **概 要** 佐藤室長からアンケート結果の概要と総合戦略の基本的な枠組みについての現時点での検討状況を説明した後、布施委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

布施委員より、前回各委員から発案のあった雇用創出策について、小国町民が自ら実現できる可能性を5点満点で評価する旨の発言。各委員より、以下のような意見があった。

- ・ウイスキー工場を建てる。
→1点。資金がかかり、企業を誘致する以外に考えにくい。
- ・水の産業を興す。
→3.5点。方法によっては低コストで起業可能。
- ・夏に農業、冬に除雪に従事する就業形態を「アグリスタータキット」として斡旋。
→5点。すぐにもやるべき。
- ・米以外の核になる畑作物を作る。
→3.5点。産地形成に必要なだけの実践農家を確保するのが困難。
- ・アスレチックやクライミングウォールなどを作る。
→1点。集客を考えると、経費がかかりすぎる。
- ・廃校施設を老人ホーム等に再利用する。
→1点。施設環境を整えるためには莫大な経費がかかる。介護保険料の上昇にもつながり、実施は困難。
- ・山をくり抜いて大きい広場を作る。
→3.5点。新たに作るのは莫大な工事費がかかり困難だが、使用していないトンネルを利用する方法はある。他地域では農業利用の実績も。
- ・クアーズとコラボで地ビールを作る。
→1点。クアーズのビール工場を誘致する必要がある。ただし、真剣にお願いしたい。

- ・ 航空ビジネスやロケットビジネスを誘致する。
 - 1 点。起業の誘致が必要。
- ・ 森を活用してバイオマス発電を行なう。
 - 4 点。発電自体は初期投資や費用対効果の面から実現困難だが、原料供給地としては実現性が高い。
- ・ 漢方薬などの高付加価値作物を栽培する。
 - 4 点。販売ルートがあれば実現可能。新規性もあるので、取り組みたい。
- ・ 山菜を売り出せるルートを作る。
 - 4 点。すでに一定の販売ルートがあり、加工にも取り組んできた。
- ・ 特産品を食べさせるレストランを開く。
 - 4 点。初期経費は大きくない。ただ、雇用という面から効果は限定的。鶏ガラや野菜などの原料供給地としてならば期待できる。
- ・ 施設が奥まったところにあり行きにくい。名所がほしい。
 - 採点不能。具体性に欠ける。雇用という点でもぼんやりしている。
- ・ スキー場に花を植える、トレッキングコースを作る、観光地整備専門の会社を作る。
 - 1～2 点。地域活性化にはなるが、完全投資先行型で収益性も不透明なので困難。
- ・ 町で工場を建て、企業に安く貸して工場を誘致する。
 - 1 点。企業誘致が前提。
- ・ ウイスキー、ビール等の原材料を供給する。
 - 3～4 点。工場誘致は困難だが、農業をベースにすればこれは可能。

次いで、実現性を高く評価して内容について、「総合戦略における基本方針と基本的な方向」の「1 本町における安定した雇用を創出する」に挙げられている

- A 既存産業の継続的な発展支援
- B 森林資源のさらなる活用と第1次産業の活性化、高度化の推進
- C 各分野の連携、協働による地域資源のブランド化の促進
- D 環境保全や健康など新たな価値を生み出す産業づくり
- E 多様な働き方の創出と起業・創業支援

の5項目のいずれに該当するかを検討した。

- ・ 夏に農業、冬に除雪に従事する就業形態を「アグリスタータキット」として斡旋。
 - E。除雪だけでなく色々な職業との組み合わせが可能。農業以外でどのくらい稼ぎたいかがポイント。
- ・ 米以外の核になる畑作物を作る。
 - E。米や畜産は大型の初期投資が必要。始めやすい作物から始めるのが現実的。
- ・ 森を活用してバイオマス発電を行なう。

- B。原材料供給基地になり得る。質の高い水を得るための森林管理にもつながれば、Dにもなる。
- ・漢方薬などの高付加価値作物を栽培する。
 - E。既存の農業とは異なり、起業に近い。
- ・山菜を売り出せるルートを作る。
 - C。
- ・特産品を食べさせるレストランを開く。
 - C。原材料供給の面から整理すべき。
- ・ウイスキー、ビール等の原材料を供給する。
 - D。
- ・Aはすべてに関する項目なので、分類されるものがなくて当然。

以上のように整理し、総合戦略の雇用創出に係る相当部分を網羅できるだけの意見が得られていることを確認した。

一方、求人数が一定程度あるにもかかわらず、希望職種とのミスマッチから「雇用の場がない」との意識が生じていることや、子育て支援等の雇用を支える仕組みづくりも重要であることから、次回は小国町内に住んで働ける条件の検討を行うこととした。

○その他 第3回部会を9月9日とした。また、第4回を10月5日～8日の間に行う予定であることから、日程を確認いただくよう連絡した。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第3回 雇用創出部会 要旨

- **日 時** 平成27年9月9日（水） 18:30～20:30
- **会 場** おぐに開発総合センター 2階 研修室
- **出席者** 懇話会委員：布施和宏、寫貫速人、大谷健人、猪野みどり、齋藤美穂、柿崎清隆
オブザーバー：井上地域整備課長、齋藤産業振興課長
事務局：佐藤政策企画室長、渡部主任
- **配布資料** ・小国町地域創生総合戦略策定のための住民等意識調査の結果について
・第2回雇用創出部会要旨
- **概 要** 佐藤室長からアンケート結果の概要について説明した後、布施委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨

アンケートの結果について各委員が感想を述べた後、布施委員を中心に、前回課題として挙げられた雇用のミスマッチや子育て支援など、雇用をとりまく諸問題について話し合った。

各委員の発言は次のとおり。

（布施委員）アンケート結果について皆さんの感想を聞きたい。

（大谷委員）想像どおり。違和感のあるところはない。

（齋藤委員）思った以上に、町に愛着を持っている若い人が多い。

（寫貫委員）想像以上に中高生が小国町に愛着を持っていて、住みたいと思っている。

（布施委員）そうすると、雇用のミスマッチがなければ、人口の社会的減少はある程度食い止められるということ。

（柿崎委員）雇用の場さえあれば人口は増えるとは思いますが、職場の面積等を考えると難しさもある。また、もっと色々なタイプの就職の場があれば良いと思うが、どういう職種を望んでいるのかもわからない。

（布施委員）中高生が意外と町に愛着を持っている。これは予想していなかった。また、自分のつきたい職業が「ある」と答えた人が意外と多かった。特に医療、福祉など。これらは介護、看護か。

（佐藤室長）そうだと思う。イメージしやすい職業ほど「ある」と答える人が多い。

（布施委員）このあたりを大事にすれば、雇用は確保されるのではないかと。また、ゲーム・インターネットを希望する人は今の状況を知らずに「ない」と回答していると思う。インターネットやソフト開発などは田舎に環境を整えて事業をやる例もある。環境さえ整備すれば、小国だからこそできるという面もあるのではないかと。

一方、アンケート結果では、必要な雇用対策として「企業誘致」を挙げている人が一番多いが、これは本当に雇用対策になるのか。水資源や原材料の供給地としての立地な

らわかるが、単に企業が来るだけでは、雇用吸収力はあるが他とのバランスを失うような気がする。

前は、私たちが考えた雇用創出の案について実現可能性を検討し、総合戦略における位置づけを整理した。今回は、子育て・介護等のために働きたいのに働けない人や希望職種がないと思っている人に対して、どうすれば小国で暮らしてもらえるか、雇用をとりまく諸問題について話し合いたい。

例えば柿崎さんはなぜ小国に戻ってきたのか。

(柿崎委員) 何か仕事をしなければと思い、家業である会社に就職することにした。特に職種にこだわりがあったわけではない。

(布施委員) そういう意識であれば、雇用のミスマッチは起きない。職業は選ばないから地元で暮らしたいと思うような、地域を大切にすることを育てれば、働く場所がないということとは生じない。

(猪野委員) 今、小中高では白い森学習をやっていて、小国の文化や自然を勉強しているので、愛着心は出てきている。ただ、例えば医療関係でみると、看護学校に進学する子供は多いが、小国では小国病院に数人しか採用がなく、外に就職してしまっただけでそのまま戻って来られない現実もある。職種は合っても、受け皿が十分ではない。

子育て支援については、小国は恵まれている。親の介護の方が課題。まだまだ働けるベテランの職人がやめて親の介護をしているという話をよく聞く。

(寫貫委員) 自分の人生なので親が強制することはできないが、地元で暮らしたい子が多いなら、働ける場を作ればそれで解決する。仕事を作ること自体は何とかなると思う。

(猪野委員) 空き家になった商店街に IT 関係の企業を誘致した例を聞いた。

(布施委員) IT 関係、アニメーター、商品開発などの工房を作ってはどうか。農業は。

(大谷委員) 職業体験で農業を選ぶ人は多いが、職業としてやりたいかという点、また別。儲からないイメージが定着しすぎている。また、のどかなイメージで就職するとすぐにやめることになる。対人関係のストレスはないが、肉体的なストレスは大きい。

(布施委員) 齋藤さんはコバレントでどんな仕事をしているのか。なぜコバレントに就職しようと思ったのか。

(齋藤委員) ガラスの火炎加工をやっている。小国に愛着があったので、小国で条件の良い就職先を探した。コバレントに勤めている人の多くはそうだと思うし、それで就職できなければ外に出る。

(布施委員) それが声なき声の大多数だと思う。その受け皿として企業誘致は重要。

一方で、これから年金が下がるので長く働く必要があるが、そのマーケットはあるか。

(猪野委員) 手に職のある技術職の人は有利。

(布施委員) 町として、全員が 70 歳まで働かなければ生きていけない社会になったら、若い人の働く場はあると思うか。

- (猪野委員) 年々子供の数は減る。その分の労働力を補わなければならないので、むしろ高齢者は働かなければならないかもしれない。
- (齋藤委員) ただ、体力的には厳しいと思う。工場なら三交代。全部が機械化されているわけでもない。
- (布施委員) 若い人の雇用が増えたとき、高齢者の働く場はなくなるのではないか。
- (大谷委員) 農業は大丈夫。高齢者でも手伝えることがあるし、すでに 70 代の人も多い。
- (柿崎委員) 土木も、現場では 70 代、80 代の人を雇っている事例もある。
- (布施委員) 農業、土木や手に職がある人は大丈夫ということか。
- (大谷委員) 高齢者より、やはり若い世代について考えた方が良い。
- (布施委員) 他に雇用に関する課題はないか。
- (柿崎委員) 小国は高血圧の人が多い。病気による介護や、自分の治療をしながら仕事をするような方法はないか。
- (布施委員) 農家は常に家にいるイメージがあるが、農家にとって介護の問題はないか。
- (大谷委員) 忙しいときは朝 5 時に出て、夜 7 時まで帰ってこないの、やはり難しい。夫婦で農業をやっていれば介護もできるかもしれない。家事を手伝う人を雇えばどうかできる。
- (布施委員) お金がかかるが、複数の事業者がまとまって仕組みを作れば可能か。
- (猪野委員) 一番大変なのは病院通い。
- (布施委員) 幼稚園の送迎バスのようなイメージで病院が送迎する、専門の送迎事業者をつくるなど、方法はありそう。本人の場合は、治療のための通院が続くと本人も会社も気まづくなってしまう。これは本人が気をつけるしかない。
- (猪野委員) 資格を持っている人は強い。工事ごとに短期雇用を続けて高給をもらっている人もいて、そういう人は引く手あまた。
- (布施委員) 小国高校でも、資格を取るような指導はしているのか。技術を持っている人は先日、ある高校生の履歴書を見たら資格がたくさん書いてあった。
- (猪野委員) 小国高校は情報処理関係の資格取得に熱心。
- (布施委員) そういう資格を取り、また進学して別の資格をとっても、外で就職してしまえば待遇の差や生活環境などのために戻ってくるのは困難。それが最大の課題か。
- (猪野委員) それに加えて、製造業だと素材を作るような業種の場合は何をやっているのかイメージしにくい。
- (布施委員) もっと宣伝しても良いのでは。
- (猪野委員) 長井市のロボット産業や鶴岡市のスパイバーなど、小さくても全国から注目を集めるような分野があれば小国に対する見方も変わるかもしれない。
- (布施委員) コアになる人材が 3〜5 人いれば実現可能。ただ、そういう人を町内から見つけるのは難しいので、環境を作って人を誘致し、そこから産業を作っていくのが良い。そ

れができるのはコバレントだと思う。

今日の議論をまとめると、雇用を取り巻く諸問題としては、介護・病気の問題や、ある程度教育を受けた人間が小国町に戻ってこようとしたときに受け皿がないという問題がコア。これについてもっと検討しないと、本当の意味での雇用創出にはならない。

前回までで参考になる部分がたくさん以上で雇用創出部会としての議論を終えることとする。

○その他 第4回部会を10月5日に4部会合同で行うこととした。

人の流れ創造部会

第1回	平成27年7月27日（月）	11
	@小国町役場 庁議室	
第2回	平成27年8月20日（木）	15
	@おぐに開発総合センター 集会室	
第3回	平成27年9月 9日（水）	20
	@おぐに開発総合センター 集会室	

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第1回 人の流れ創造部会 要旨

- 日 時 平成27年7月27日（月） 18:30～20:30
- 会 場 役場3階 庁議室
- 出席者 懇話会委員： 山中知彦、舟山和樹、山口ひとみ、佐藤大雅、舟山玲奈
オブザーバー：野澤会計管理者、舟山地域振興主幹、仁科商工観光主幹
事務局： 佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、渡部主任
- 概 要 講師紹介、自己紹介に続き、事務局より会議開催趣旨とまちづくりの基本的な考え方等について説明した後、山中先生を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なる。）

（山中）進め方については各部会に任せるとのことだったので、特に準備をしていない。人数も少ないので、形式張らずに、ざっくばらんに進めたい。

私の小国町とのかかわりは深く、北部地域のブナ林の活用や森林セラピー、小玉川小中学校の校舎活用などの調査や計画づくりなどに関わった。6年半前に現在の新潟県立大学に移った。

（山口）出身は鳥取県で、結婚して小国に来た。食や環境に興味があって、町が主催するワークショップなどにもいろいろと関わらせていただいた。農家をしているが、最近は域学連携事業などの際に学生にご飯を提供したりして関わっている。どのテーマも生きていくうえでは切れないものであるので、他の部会のテーマも含めて話をしていければと思う。

（舟山和）高校・専門学校、そして卒業して数年、小国を離れていたが、ずっと小国に帰ってきたいと思っていた。小玉川青年団いちは小玉川地域の30代から10代までの若い人の集まり。小玉川は遠出をしないと遊ぶことができなかったのも、自分たちで楽しむ方法はないかと考えて、いろいろ取り組んでいる。雪祭りは、町内外からたくさんの人に来ていただいている。

（舟山玲）1年生のときに「聞き書き甲子園」という活動に参加した。これは、全国の高校生が地域の伝統文化等を伝える「書き橋」になるというもの。その活動の中で学んだ過疎や文化が廃れるというところがこのテーマに共通するところがあると思い、この部会を選んだ。また自分が住んでいる小玉川地区はこのテーマに合っていると思った。

（佐藤）小国には愛着があって、廃れていくのはいやだなあと思っている。学校で町のことを話す機会がなく、町のこともきちんと話してみないと思って参加した。

（山口）小国は四季がはっきりしていて季節感を豊かに感じる。こんなに雪が降るのに、生活が

止まらない（マヒしない）のはすごいと思った。

また、東部地区は基督教独立学園があって、異質なものを受け入れる力が他より強く、嫁いできた時にかわいがってもらった。雪が降ることで、人の助け合いがあったり、大地からの恵みがあったりして、すばらしいと思った。小国はいろんなものを受け入れる力があると思う。

小国に来ると元気が出る人を交流人口と捉えて、小国に住む人とかかわりを持ちながら、交流をしていけばいいのではないかな。そうした中から、何かやりたいことが生まれて、それにチャレンジできることが大事なのではないかな。

（舟山和）雪祭りには親子連れが多く来てくれる。またフェイスブックでも情報を流しているので、それを見て東京から来てくれるリピーターもいます。

不便なところなので、最初から移住のことを考えるのは大変なことだと思う。まずは「こんな楽しみ方があるよ」というのを形にして、見せていければと思う。自分たちが楽しめるってことが、はじめたきっかけでもあり、目的でもある。

熊祭りのときは、地元を出て行った人も帰ってきて手伝ってくれる。同窓会のように毎年楽しみだ。

（舟山玲）小玉川に住み始めて1年と少しだけれど、小玉川は人と人のかかわりが深いと感じる。

私自身人と話をするのが好き。小玉川は人と人のかかわりが魅力だと思う。

町中に住んでいたこともあったが、小国の中でも町と田舎ではずいぶん違うと思う。町中は隣近所に興味がない。

（佐藤）自分が住んでいるところは小国町の中では都会だ。小さい頃は岩井沢以外のお祭りにも行ったりした。

（山中）佐藤さんは「小国」にこだわりがあるが、山口さん、和樹さん、舟山さんは、「小国」というよりも自分が属しているコミュニティに対するこだわりが強いようだ。外に発信する時に「小国」というくくりで発信するか、小玉川、胡桃平とうくくりで発信するかというところがポイントか。

また、移住が多いことがいいことなのか、もしかしたら交流人口で頻度が多く訪ねてくれる方が多い方がいいという意見もあるかもしれない。

（舟山玲）国際関係に興味があるので、卒業後はそれを活かせる職業に就きたいと思っているが、小玉川、小国が好きなので、いずれは帰ってきたい。

（佐藤）外に行って仕事に就きたいとは思っているが、仕事を辞めたら帰ってきたいと思う。

(山中) 6年半前に単身赴任で新潟に住むことになったが、地方に住んだのは初めてで、住んでみると地方に対する見方が変わる。また、都会に対する見方も変わってくる。外に魅力を発信するというとき、地元において地元から発信することと、外から見た時にどうなのかということもあると思う。

(山口) 都会の学生と関わっていると、こちらが思っている以上にさまざまなことを楽しんでも、小国を好きになってくれる。都会の生活と小国の生活に相当のギャップがあって、そこに驚くことの魅力を、人を引き寄せる手段として提案することが、次のステップになるのではないかと思う。

都会で物産品販売を行うが、販売した後のつながりがない。気に入ってもらったものはいつでも送れるよっていうアプローチをしていないと思う。小玉川に来てくれる人にも、「おいしかったらいつでも送ってあげられるよ」とか、「山菜のころもおもしろいんだよ」という案内が必要なのでは。その後のつながりを持つための仕組みが必要なんじゃないか。小国のファンクラブをきちんと整備していくことが次の段階なのかなあと思う。小国が第2第3のふるさとになる。ちょっと遠い親戚、何となくちょっと気にかかるねというような感覚。

(山中) 新潟の「かがやき農園」から米を取り寄せているが、送られてくるたびに季節の何かと言葉が一人一人宛に添えられている。妻はそこがまた気に入って友達にも紹介することにつながっている。都会に出て行った息子や娘に、実家から野菜や米を送る感覚。

(舟山和) 一人一人宛に言葉が添えられるのは大変だと思うがすばらしい。

(山口) やっている方は楽しい、決して嫌ではない。やだと思う人もいるかもしれないが。

(山中) 単純に仕組みを作れば誰でもできるかというものではない。

(山口) ただ、仕組みがあれば、フォローできる人が仕事としてやればいい。お土産探したり、書き添えたりが好きな人に発送お願いしますという仕事を作れたらば。自分が必要とされることをイメージできる状態にすればヒットする人はいると思う。

生産者だけでない、消費者だけでない、お互いを思い合い、支えあう関係じゃないと楽しくないし、長く続かないと思う。その関係が広がることで町の運営も楽になるのだと思う。小国に来ることが全てではなく、つながっていることが大切で、仕事に煮詰まった時に小国に来るといような、小国のプログラムをできるだけ用意できればと思うし、それが仕事になれば。

(舟山和) 小国の魅力というか、小国ならではの大量の「雪」、大量の自然、きれいな川、自然があふれている。ここで味わえる体験を子どもたちにしてもらい、楽しいと思えば、大人になっても帰ってきてもらえるような気がする。

小国の中では、それぞれの団体で動いていることが多いので、もっと連携できればいいと

思う。イベントなどがありふれている。いろんな段階が連携する場、例えば歌舞伎と連携すれば新しい魅力、すばらし発見があるかもしれない。

(舟山玲) 南部地区の中でもたくさん地域づくりをしている団体はあるし、東部だったり北部だったり中心部にもあると思うので、小国町を良くしようと思うなら、各団体が集まってこういう風に話し合うのもいいなと思う。

(佐藤) イベントをして人を呼び込むことだけ考えていたが、自分が必要とされる仕事を作って人を呼ぶという発想が思いつかなかった。

(山口) 次回は、町の意向などもお聞きしたい。

(舟山玲) 具体的なトピックがあった方がより深い話ができるのではないかな。

(佐藤) 目標が大きすぎるので、具体的なところがあった方がいい。

(事務局) 次回は、整理している事業や町で考えている方向性などをお示しして、それをたたき台としてご意見をいただければ。最終的には、具体的な施策があってもかまわないが、人の流れを作る方向性でもかまわない。

(山中) 小国の中でいろいろ人の流れに係る方がいて、小国の中のそれぞれで、がんばっていることがわかった。

またいきなり「移住」ではなくて、ロコミ、ネットワークを使って徐々に徐々に深まりをつけていくということが良さそうだ。

そして、町全体として、人の流れを作るためへのつながりが、うまくつながっていないようだということもわかった。

2回目では、町の事業計画の整理したものやアンケートの結果なども出していただき、それについて話をしてみたい。

3回目では、「具体的にこんなことをしたらどうか」というところまでいければと思う。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第2回 人の流れ創造部会 要旨

- 日 時 平成27年8月20日（木） 18:30～20:30
- 会 場 おぐに開発総合センター 集会室
- 出席者 懇話会委員： 山中知彦、舟山和樹、山口ひとみ、安部、隆利、
佐藤大雅、舟山玲奈
オブザーバー：野澤会計管理者、舟山地域振興主幹、仁科商工観光主幹
事務局： 山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、
廣瀬主任、渡部主任
- 概 要 前回の振り返りを行い、事務局より他の懇話会部会の内容、総合戦略の基本方針と基本的な方向、総合計画に沿った人の流れに関わる部分の事業等について説明し、その後、山中先生を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

- ・ 前回の振り返り
- ・ 安部さん自己紹介

（安部）古田歌舞伎は、昭和30年代に途絶えて、昭和60年代にまた復興した。復興したのは私の父の世代で、当時私は20代であり関わっていなかった。興味はなかったが30代に参加しはじめたら、どっぷりはまってしまった。私と同年代の人も同じような感じである。私の10歳ぐらい下の人たちも少しずつ参加してきている。20代、30代の人たちがなかなか参加してくれなくて困っていたが、去年今年あたり20代の人5名ほど参加してくれた。新発田市にいる私の娘の旦那も毎年見ているうちに興味がわきぜひ参加したいと言うことで、今年から毎週末通って練習している。私たちの後継者を心配していたが、何とか目処が付いてきた。私がやり始めてから20数年、いろんな流れがあったが、去っていく人、来る人、やり続ける人といろんな人の流れがあったと感じている。古田歌舞伎の中では、そんな人の流れがあった。

（事務局から他の懇話会部会の内容、総合戦略の基本方針と基本的な方向、総合計画に沿った人の流れに関わる部分の事業等について説明）

（安部）若い方が残れるような事業、一旦出て行った方が戻れるような事業、観光などで他県から人を呼び込める事業、その三本立てのようだが、私としては若い方が残れるような事業に

一番力をいれてもらいたいと思う。残れないというのは、仕事がないというのが一番なのかなあと感じる。

(山中) 雇用創出部会の内容に関わるところかと思う。まずは今いる人を大事にして、次に出て行った人を、次にJターン、Iターンのように縁がなかったけれどもこれから縁をつくる人、そうした順で重きをおくということですね。

(山口) 人の流れを呼び込むとなると、今町でやろうとしている事業だけでは足りないのではないかと思う。人の流れをつくる時に、活性化というか経済効果をしっかりと積み重ねないと結果につながらないと思う。しっかりと小国とつながってお金を落としてくれる。戻ってくる人や来てくれる人ということだけでなく、つながっていることを大事にする施策がもっとあった方がいいのではないかと思う。好きになってくれた人たちが常につながっている、学生として外に出て行っても何かしらの形で常につながっている、そういうことが仕組みとしてあってもいいのではないかと思う。ファンクラブやサポーターの仕組みで、町の人口は8千とか7千とかになるけれども、町のファンは2千とか3千とか、みんなで集めないと1万人のまちづくりなんて言えないだろうと思う。そういう動きが出てきてくれればいいなと思っている。

(舟山和) 中高生のアンケート結果で、イベントに関わりたいという人が結構いるみたいだ。若いうちは、楽しいことを自分たちでやりたいという気持ちがあると思う。そのきっかけを私や団体が作って手伝ってもらい、そういうところから小国から離れないようなつながり作りができると思う。今年の雪祭りでは、高校生カフェをやろうとしたが、都合が合わなくてできなかった。地元の人や域学連携の学生が手伝ってくれた。そうしたことがきっかけで「楽しいな」という思い出を残していつてもらいたい。

(山中) アンケートの結果で、イベントに参加している実績や参加したいという希望を取り込んで、それぞれの個々の活動の中に仕組みとして作っていければ、山口さんが言うように積み重なってつながっていくと思う。行政はたぶん手が回らないから、町民の中で情報をうまく回して、一人一人が積み上げてつながっていけば、実現していくのではないかな。

先ほどの安部さんの話で、ずっと若い人が見向きもしなかったけれども、ここに来て少し入ってきているということであったが、何かきっかけがあったのか。

(安部) 沖庭小学校の閉校式のときに、古田歌舞伎を上演したが、若い年代の連中がそれを見て、「格好いいな」と思って盛り上がっていた。そこに声をかけてみたら、やってもいいとなった。勢いですね。

(舟山玲) 町民個人で移住やIターンを促進するのは難しいと思うので、まず小国のファンを増やす、小国の魅力を発信していくことが大切だと思う。私は外国に興味があるが、町の施策

に外国人観光客を増やすというがあるので、こういうところにつながって魅力を発信したりすることが、自分にはできるかなと思った。

(山中) 国際系に進みたいという希望があったけれども、雪を知らない外国人が雪まつりに来た時に、サービスできるというふうにつながるかもしれない。それはバラバラだった「国際系に進みたい」という希望と、「いつか帰ってきたい」という希望につながる可能性がある。

(佐藤) 生まれた時からずっと小国にいと、自然が豊だけれどもそれに慣れてしまつて、少しずつ小国以外のことを知り出すと、小国の魅力に気づけなくて外に目がいつてしまい、外で仕事したいと思う人が多くなるといふ。若い人が残る事業ってなかなか難しいと思うので、高校卒業したら一旦出て、そこでつながっていける事業をする方が効率的だと思う。

(舟山和) 出ないとわからない魅力はかなりあると思う。

(安部) 親から、長男だから残れとずっと言われていた。高校を卒業して東芝セラミックスに入社した。時々半年ぐらい出張することはあったが、どこに行つても、小国はいいなと思つていふ。私も佐藤君ぐらいのときは、やっぱりよそに出たいと思つていふ。ずっと暮らしていふうちに、若い頃にはわからなかった良さがわかつてきた。私の場合は、一番は人のつながりです。ここにいて一番の魅力は人のつながりだと思ひます。

(山中) アンケートの結果と町がやろうとしている施策等を見て、どういった点が足りないか。

(佐藤) 自分が一回出て、帰つてくることを考えた時に、あつた方がいいと思ひのは、買い物ができるところと、福祉のサービスもあつた方が、Uターンしやすいと思ひ。不安があると戻りづらひ。安心できるような施設がたくさんあつた方がいいと思ひ。

(舟山玲) 親を見ていふと毎日除雪で大変だと思ひ。除雪を充実することがいいのではないかと思ひ。うちのじいちゃん近所の5軒位の雪下ろしをしていて、そうしたものが事業としてあればいいのではないかと思ひ。

(舟山和) 住むとなれば、雇用が大前提。小国にはいいところいろいろあるので、そうしたものを廻るツアーがあればいいと思ひ。タクシーで回れるようなことができたらおもしろいと思ひ。小国町は不便だといふアンケート結果もあつたが、そういうところで何かできればと思ひ。

(山中) コミュニティビジネスのようなものでうまく回つていくといいと思ひ。

(山口) コミュニティビジネスをたくさんつくること、これからの打開策なのではないかと思ひていふ。困つていふことは全部仕事にできる可能性がある。まだまだつながつていないイベントとか、小国町全体として提案できるものがどのくらいあるのか、項目出しをしてどう組み合わせるいったらいいのか、そういうことをみんなで考えるといいのではないか。南部の

イベントに来た人に「来週は北部でこんなことあるよ」というような展開になるかもしれない。毎日のプログラムは難しくても、週末をみんなでフォローし合うといったことができるのではないかな。

イベントに来てくれた人にファンクラブの案内をするとか、情報を出せる人をストックすることが重要なのではないかな。

また、都会じゃないとできない仕事も減ってきていると思うので、環境のいいこちらでやってもらおうとか、そうしたことを発想してもいい時代なのではないかな。みんなが、魅力を発信できるような、迎え入れられるような仕組みができれば、もっと楽になるのではないかな。

(山中) デマンドタクシーは、観光的なニーズと福祉的なニーズもあるが、それを別々に考えるのではなく、コミュニティビジネスとして重ねていけば成立するかもしれない。個々の課題に個別に対応しているうちは、採算性などで解決できないことが多いと思うが、横につなげることが大切だろう。

また小国の中のそれぞれの地域で行っている活動やそれに関わる人たちがつながっていくことが大切ではないかな。観光という面だけでなく、コミュニティビジネスを効率化させていくためにも、外から人を呼び込む前に、町の中の人とのコミュニケーションをもう少しつなぐということが前提なのではないかな。

(安部) 各地区にいいイベント、いい団体があるけれども、その横のつながりが希薄だというふうに感じる。二昔前は連合青年団というものがあつたが、それと同じように、連合中年団でも連合老年団でもいいが、そういう人たちが集まって、お互いの情報を共有して、応援に行くかとか、盛り上げに行くかとか、団体同士で協力し合うことが必要だと思う。

(山中) 新潟県十日町池谷集落の事例紹介

- ・これまでの議論を踏まえたうえで、部会のテーマに沿った具体的なプロジェクトを3回目のプロジェクトまでに考え、ペーパーにしてくることを宿題とした。
- ・次回部会の日程を9月9日に変更した。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第3回 人の流れ創造部会 要旨

- 日 時 平成27年9月9日（水） 18:30～20:30
- 会 場 おぐに開発総合センター 集会室
- 出席者 懇話会委員： 山中知彦、舟山和樹、山口ひとみ、安部、隆利、
佐藤大雅、舟山玲奈
オブザーバー：野澤会計管理者、仁科商工観光主幹
事務局： 山口総務企画課長、小野政策企画担当主査、廣瀬主任
- 概 要 前回の振り返り、アンケート結果の説明、他部会の内容紹介の後、人の流れ創造部会における具体的なプロジェクトについて話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

- ・ 前回の振り返り

（事務局から他の懇話会部会の内容、総合戦略の基本方針と基本的な方向、総合計画に沿った人の流れに関わる部分の事業等について説明）

- ・ それぞれのプロジェクトの提案↓

（佐藤）若者のUターン、Iターンを目的とした計画を考えた。Uターンでは、安心して戻ってこられる施設や環境が大事と思い、「安定した雇用」に着目して考えた。中高生のアンケートで、将来就きたい職業として「医療・福祉」関係に就きたい人が多かったので、満天の家やさいわい荘の施設を充実されることと、小国病院でオープンホスピタルを行い、大学などを卒業後、小国病院で働いてもらうことを考えた。「オープンホスピタル」とは大学のオープンキャンパスのように、誰でも病院の仕事を体験してもらえるもの。

Iターンでは、町外の人を引きつける事業として、体験活動に着目した。町外の大学生に空き家や高齢者宅の雪かき、また荒れた畑などの耕作をしてもらいながら、地域の人とかかわりを持ってもらうことで小国を好きになってもらい、移住につなげることを考えた。

（舟山玲）「小国町の良さを最大限に活かし、春夏秋冬賑わう町」をテーマにレポートを作成した。

町外に住む人にとって、どのような町だったらわざわざ足を運びたいか、考えた。

都会の企業ではストレスケアを促進していると聞いたので、小国への癒しの旅を提供できたらと思った。森林セラピー体験や小国の料理、温泉体験を通して小国にふれあってもらい、リピーターになってもらいたいと思った。小国町を第二の故郷と感じてもらえれば、熊まつりや古田歌舞伎にも来てもらえると思う。

春、夏、秋、冬とそれぞれ特色を活かしたイベントなどを考えてみた。「天然かき氷」は今

流行っていて、ネットで検索してみたら、近くでは日光でしか行っていない、小国でやれば東北では初かもしれない。天然氷を作る環境が小国に合っていて、小国の良さでもある豊かな水を活かすには、これがベストなのではないかと思った。多くの集客も望めると思う。

データセンターは、都市に情報が集中している中で、災害時の混乱を未然に防ぐため、小国にバックアップとなるような施設をつくれば、企業の方が小国に単身赴任などで来ることになるので、小国に人の流れができるのではないかと思った。

(舟山和) コミュニティビジネスという視点で、まずは小国のすばらしさを知ってもらって、Ｉターンを呼ぶための内容を考えた。

一つ目は町営バスで、伝統的な技術や昔話を話せる高齢者の家の前に「伝統技術の駅」や「語り部の駅」というバス停をつくって、一定の時間話を聞いてもらい、また次のバスに乗ってもらうもの考えた。はじめは一月に一回でも、徐々に増やしていけたらいいと思う。定着していけば、そうした人たちの雇用にもつながるのではないかな。

二つ目は、小国町内のイベント団体の「橋がけ」として、それぞれの団体がどのようなことをしているのかなどを細かく調べて、その中で協力できる場所があれば、協力できればいいのではないかな。また、町でやっているイベントや他の団体がやっているイベントをまとめた「イベントマップ」があれば、お客さんもわかり易く来易いのではないかな。

三つ目は、小国町の子どもたちや近隣の町の子どもたちに、小国町の自然のすばらしさを知ってもらうため、アスレチックをつくって遊んでもらえたらいいのではないかなと思った。

(山口) 今現在人の流れとして、登山や温泉といった観光流入があり、他に自然や農業体験などの交流も少しずつ行われるようになっていて、そうした動きが太くなっていくてくれればいいと思う。それに対して町内の団体同士が、情報共有をしていないので、もっと情報共有をしていけばいいのではないかなと思う。そして新しく小国を元気にするネットワークのようなものが作れたらいいと思っている。今、森林セラピーのプログラムを作ろうと女性たちが何人か集まってＯＧＮ（小国を元気にするネットワーク）というグループを作っている。ＯＧＮは正式には発足していないが、今は１０月３、４日に行われる女性向けのセラピーツアーのサポートをするため活動している。南部や北部そして高校生など興味のある人たちでＯＧＮのようなグループを作り、集まって話し合いながら進めていけたらいいなと思っている。いつでも小国に来て楽しめる状態になるのがベストだと思うので、プログラムの内容をできるだけストックして、毎週末できるイベントや年間スケジュールをみんなで作れたらいいのではないかな。また、問い合わせの窓口がどこかがはっきりしていないので、明確化できればいいと思っている。そしてそういうことがコミュニティビジネスにつながっていったらいいなと

思っている。各地域で経済的自立ができるようになることが大事だと思う。コミュニティビジネスは有償ボランティアと捉えていて、少しでも収入があることで自分がするにも苦ではなくなり、それがお小遣いになったり、家計の足しになったりして広がっていったりするの
で、有償ボランティアの仕組みをつくっていったらいいと思っている。そうした意味でエネルギー自給もできればいいなと思っている。

また現在、緑のふるさと協力隊や法政大学、早稲田大学の学生など、町外の人が小国と関わってくれているので、その人たちを窓口にして自分たちが楽しめるプログラムやコンテンツを作ってもらふこと。また助人交流プログラムでは、農作業や除雪のお手伝いをちゃんと受け入れられるような仕組みをつくること。そうして小国に親しんでもらって小国のファンを組織化するためのシステムづくりをすること。さらに大学生ぐらいになるとかなり専門的な知識や興味もあるので、そうしたことを実験する場として小国を提供できたらいい。

(安部)「(小国への、小国の) 人の流れを創生するには」をテーマに掲げてみました。雇用と地元活性と娯楽の柱立てで考えて、自己採点してみた。雇用面では、若年者層と高齢者層の人口増を目的に老人ホーム、グループホームの増設という手法を考えた。地元活性という面では地域団体・各種団体などの連携による人の流れの活性化を目的にイベント支援連合団体の設立を考えた。娯楽面では、町内外の人や文化の交流場の充実による人の流れの活性化を目的に総合センターと道の駅を統合した道の駅文化会館の開設を考えてみた。

・提案されたプロジェクトに対する意見交換↓

(オープンホスピタル)

- ・アンケート結果でも医療福祉関係に興味のある中高生は多かったの
で、こうしたアイデアはいいと思う。参加してみたい人は多いと思うので実現できると思う。

(天然かき氷)

- ・小国でやるべきではないかと思うが、どう商売にしていくかは煮詰める必要がある。
- ・天然かき氷は、お酒を飲む人のために天然ロックとするのもいいのではないか。

(町営バス利用)

- ・バスで来て、次のバスまでゆったりした時間を過ごしてもらおうというのはすばらしい発想だと思う。

(イベント団体の架け橋、OGN、イベント支援連合団体)

- ・ネットワークを広げて進めていくのは大賛成だ。誰が先になってやっていくかが大事だと思う。
- ・OGNやイベントマップは、みんなでの意見が重なり合って、協力し合ってプログラムを

つくっていこうとできると思う。

- ・イベント団体の連携は自分が考えていることと同じなのでいいなと思った。
- ・OGNに「いちころ」も入れてもらえれば。イベントプログラムなどは同じ考えなのでいいと思った。
- ・個々で独立しているものをネットワークとして一つにすれば、強い力になると思う。
- ・イベント団体の連携は、もう既にOGNなど団体があるし、お金がかかるわけでもないの
で、やる気があれば絶対にできると思うので、実現可能だろう。活性化すればそうした中
から雇用も生まれると思う。人の流れも良くなると思う。

(老人ホーム、グループホームの増設)

- ・大きいものをつくるのは大変なので、空き家対策と一緒にしてやるのと取組やすいのでは
ないか。
- ・役場でのインターンシップの際、老人ホームの空きがなくて困っている人を見かけた。ニー
ズがあるので是非ともすべきである。
- ・大義名分もあるし、雇用も生まれるが、要介護者だけなので、要介護でない人も含めたら
いいのではないか。

(アスレチック)

- ・大学生などのワークショップでアスレチックを造ってもらうのもいいのではないか。
- ・町内外から親子連れで集客できるし、需要があるのでつくった分の元は取れると思う
- ・親子連れで来てもらって、小国に興味を持ってもらうことで、さらにどんどん来てもらえ
るのではないか。

(道の駅文化会館)

- ・語り部や伝統工芸も含めて道の駅にあれば、駅から道の駅までの送迎で、結構人は来てく
れるのではないかと思う。ゆるり座という語り部のグループやつる細工の会があるので、
そういう人たちが常駐していれば、結構来てくれるのではないか。
- ・総合センターが古くなって、新しい施設を造る計画があると聞いた。道の駅も太陽光パネ
ルを整備している。新しいことに取り組んでいるので、実現不可能ではないかと思う。
- ・総合センターは現在計画中なのであるし、経済効果もあり人の流れもあるので、とてもい
いと思う。
- ・長い目で見て必要だと思う。

(大学生の除雪、農作業体験)

- ・Iターンを呼び込むには大学生が楽しんでもらうことが大事だと思う。荒れた田畑の問題
も、これで農業も守れるのではないか。

- ・法政大学や早稲田大学の学生が来ていることは初めて知った。除雪や農作業などに参加してもらえればいいと思う。法政大学や早稲田大学だけでなく、全国の大学生にも、小国に来てもらったらいいと思う。

(データセンター)

- ・データセンターは災害が少ないのでいいと思う。雪対策は必要だが、逆にサーバーの熱を雪で冷やすといったこともできるのではないかな。

(コミュニティビジネス)

- ・お金にしていけるための団体・組織をつくるのが大切だと思った。

(赤芝峠を全国屈指の紅葉スポットに)

- ・紅葉スポット巡りをつくったらいいのではないかな。橋からの眺めがいい場所は結構ある。散策もできるといいし、町内の紅葉巡りを案内できるといいと思う。時間がかかるとお昼を食べることにもなるので、町内の施設を利用してもらうことにつながる。

(助人交流プログラム)

- ・大学生だけでなく海外の人を入れてやっているところもあるので、そういう方々も入れて楽しんだらいいのではないかなと思った。

(星空・蛍ウォッチング)

- ・都会は夜でも明るいけど、田舎は静かで暗くて、都会にはないきれいな夜空だ。都会にはない魅力で、都会の人にとってはいい活動になると思った。

(山中) 住民、Uターン、Iターン、ファンクラブの関係を図示するところ（別紙）なり、みんなのアイディアは、この図にそれぞれプロットできると思う。そして、こうした人の流れをつくるためのコアとなるもの、団体の連合だとかOGNとかイベント団体の橋がけとか、それが一番大事ではないかな。町内外の人の流れをつくるために一番大事なのは町内のネットワークなのではないかな。それによってさまざまなことができ、それによって交流人口、ファンクラブと関わることにより、自ずとIターンが増えると思う。コアとなる部分を固めて、ファンクラブが増え、その延長上にUターン、Iターンがある。そのため等身大、自分たちができることから固めていくことが一番近道だという気がした。

(安部) 有閑壮年層とした60代、70代は、何に燃えたらいいだろうと思っている人はいっぱいいると思う。そういう人たちに火をつけてやればできるのではないかなと思う。

(山中) 働いている人たちも、週末は参加できるし、中高生だって参加できる。そうした参加は町民のインターンシップではないかな。

(山口) 有閑マダム、有閑ダディに活躍してもらいたいが、それと若い人たちとのつながりができていないことがネックだと思う。ある程度の年代の人がちゃんと若い人にバトンタッチできるということが強い組織の要件だと思うが、小国ではできていないと思う。高校生もこうしていろいろ考えていて、それが実現していくから面白い。それが否定されると絶対につまらなく外に可能性を求めると思う。小国は可能性もあるし、外から見ている人もすごくいいところだと言っているの、いろんなやってみたいことをクリアできる、やらせてくれる、というような場所になってくれるといいと思う。戻ってきていろいろやっているエネルギーあふれる人もいるので、そうした人をサポートする仕組みになればいいと思う。

(山中) 有閑マダム有閑ダディと若者をつなぐのに、子育てが終わった女性はつなぎ役として大事だと思う。女性は男性に比べるとつなぐ力がある。

(山口) 女性は人とのつながりが濃いと思う。家庭や地域でのお年寄りや子育ての中で子どもとおした他者とのつながりなど、会社、仕事ではないつながりがある。

小国の人は優しいといわれるが、適度に気にしてくれることが気持ちいい。みんなが気持ちよく暮らしていけるにはどうしたらいいのかという視点が大切だと思う。認めてもらいたいと思っているし、やりたいと思ったことが実現すると励みになる。関わったことが少しでも前に進めばOK。そうしたものが積み重なっていけば、大きな稼ぎにはならないが、何かあった時のセーフティガードにはなると思う。そうした仕組みがあれば、外からも受け入れられるし、外に求めることもできる。

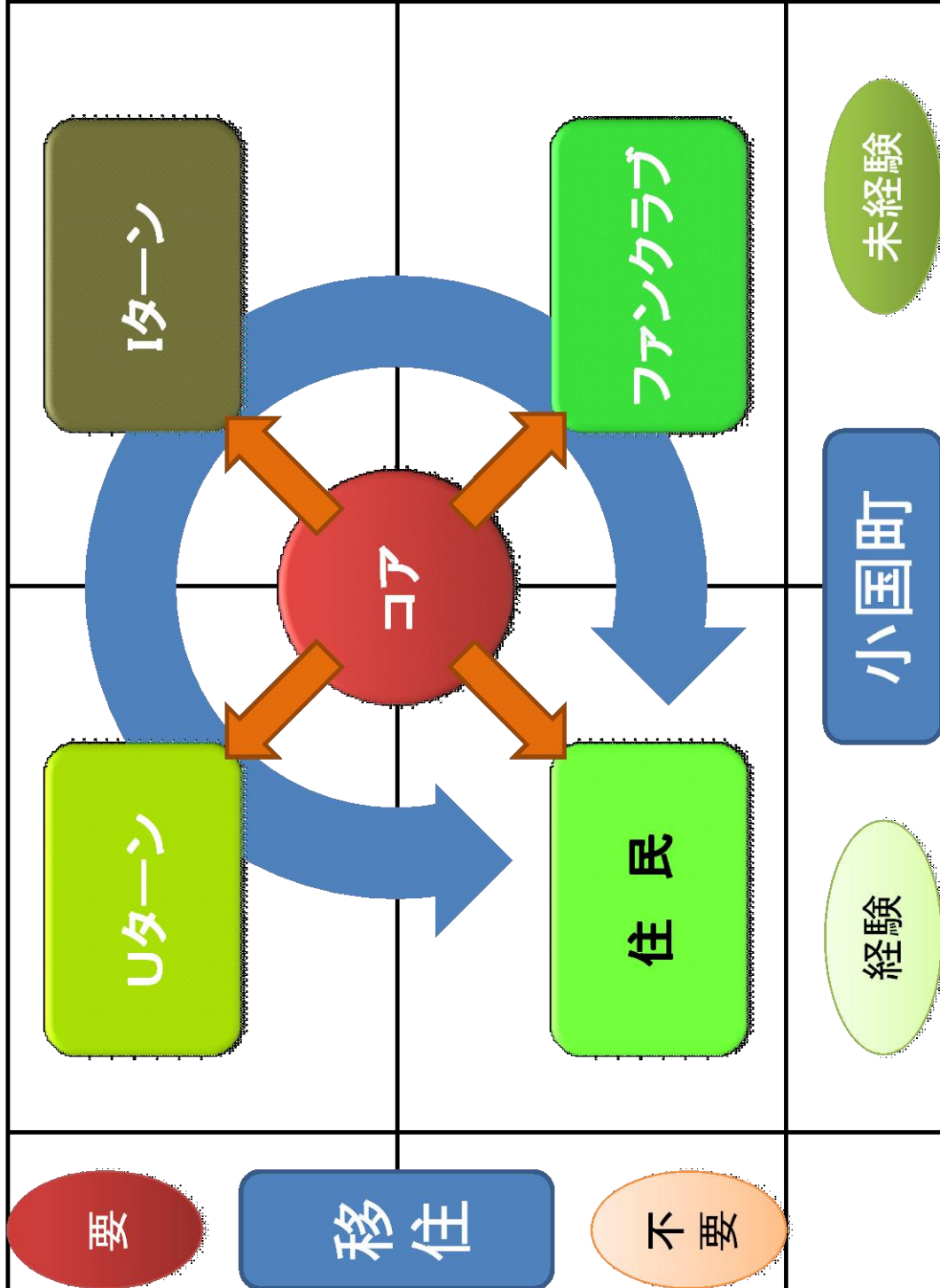
(山中) そうした仕組みは、町民だけでもできるかもしれないが、場をつくったりサポートしたり、行政がしてくれると心強い。

- ・ 第4回の部会は、他の部会と合同で、10月5日に開催することを周知。
- ・ 次回部会で人の流れ創造部会を代表として、山口委員に発表いただくこととした。

人の流れ関係図

(策定懇話会 人の流れ創造部会)

2015.9.9



目的：若者のUターンとIターン

○安心して戻ってこれる施設や環境

- ・食料品や生活用品の買えるところ
- ・安定した雇用←
- ・老後の福祉サービスが充実している
- ・交通機関が便利

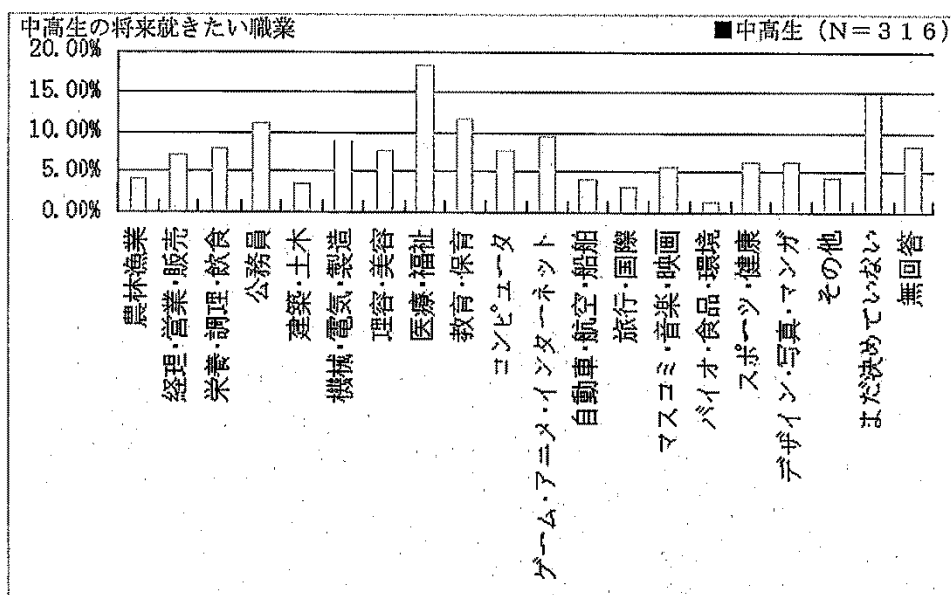
○町外の人を引き付ける事業

- ・体験活動←
- ・小国出身者による町外での広報活動

「安定した雇用」

→冬は除雪が大変になるので、それを利用して仕事を増やせば良い

→小国開発の雇用を増やす



・中高生が将来就きたいと思っている職業で、特に医療・福祉に就きたいと思っている人が多いので、満天の家やさいわい荘の施設を充実させる、小国病院でオープンホスピタルなどの体験活動を行い、小国病院の仕事に実際に触れてもらい、雇用の促進を図る。

「体験活動」

・冬は空き家や高齢者の家の雪かきが大変なので、それを利用して町外の大学生を呼び込む。そこで来た大学生は、地域の人たちと関わりをもち、小国を好きになってくれることで、小国への定住に繋がる。

・夏は荒れた畑などの土地を耕し、町外の人に農業を体験していただき、小国の自然の恵みを身をもって知ってもらう。

小国町の良さを最大限に生かし、春夏秋冬賑わう町

町外に住む人にとって、どのような町だったらわざわざ足を運びたいくなるような町か。ファンになれるのか。立場を置き換え自分なりの目線で考えました。

役場の方のお話からインスパイアされて、
都会の企業ではストレスケアを促進している ____ / 企業と連携し、小国町へ“癒し”の旅

① 温身平森林セラピー

飯豊山荘にあるストレスチェック、セラピーアテンダントなどでセラピーの質を向上させる。

② 小国の豊かな自然を生かした料理を振る舞う。(ex 雑穀・イワナ・山菜 etc)

③ 都会とは一味違ったおもてなしで、人の温かさを感じることでできる宿泊。小国町の良さを実感しリピーター (ex 熊祭り・古田歌舞伎・石楠花祭り etc) になってもらう。

④ リラックスできる温泉で疲れを癒す。

人の温かさや、人と人とのつながりを実感し都会へ帰る。 ____ / また小国に行きたい。親しくな
たあの人達に久々に会いたい。 ____ / 第二の故郷

Spring

・日本一の観光ワラビ園を目標にし、観光客数の促進を図る。

観光客数のデータによると、観光客数が右肩上がりなのは、ワラビ園のみ。ワラビ園となると年配層が中心となることが予想される。

宿泊施設、ワラビ園スタッフを配置するなどといったサービス、交通 (看板や駐車場) を徹底。

Summer

・流行りつつある天然かき氷を有名にする。

調べた限りでは、東北で天然氷のかき氷を作っているところはなく、全国的にもまだ少ない。日本一美味しいく、バリエーション豊富な天然かき氷を提供できれば小国町は注目されると思う。

ブナ茶屋で販売することで、より多くの人に知ってもらうことができる。

小国の良さの1つでもある“豊かな水”を生かすことができる。



(引用 Yahoo 画像検索)



冬、池に清水を入れ凍らせる。凍ったらカットし貯蔵庫に保管する。それを、夏にかき氷として販売する。

・星空・蛍ウォッチングで集客率アップ 米沢市の某温泉は蛍を売りにして集客し成功していると聞いた。きれいな星空や蛍を見ることができるとポイントが絞りを整備する。

・昆虫採集で集客率アップ 親子連れで昼間森に入り昆虫採集をする。その際、森や昆虫に詳しいスタッフをつける。仕掛けを張るなど楽しめる昆虫採集を企画する。

fall

・理想としては、赤芝峠を全国屈指の紅葉スポットにする。

問題点 見通しが悪く交通量が多いため危険。

解決策 バスを使い、ブナ茶屋から遊歩道まで送迎。例えば、30分間隔など往復する時間を決める。

Winter

・横根スキー場を大々的にPRし観光客を集める。

周辺にハーフパイプのあるスキー場は少なく、横根スキー場ではオリンピック銀メダリストを輩出したため、ニーズが高いことが予想される。

現在よりも設備を整えたり、大会を主催するなどして集客率アップを図る。

また、小国町内でも競技人口アップを図ることも大切になってくるだろう。

データセンター

・現在、首都直下地震などが懸念されているので、災害時の混乱を防ぐために機密情報などのバックアップをとれるような施設を小国町に配置する。小国町は、地震・台風など周辺地区に比べても災害が少ない。また、サーバーは熱に弱いので山中に建設すれば夏でも機能するだろう。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会

人の流れ創造部会の具体的なプロジェクトについて

舟山 和樹

前回までの議論の中で、「大事なのはコミュニティービジネスを生かして地域外の方々に小国の素晴らしさを知ってもらう」ことが大事だと思った。

1、町の公共交通機関を利用して集客する

タクシー・町営バスなどのバス停として、「伝統技術の駅」や「語り部の駅」など、昔ながらの小国町に伝わる伝統的な技術を持つ方々の近くにバス停（駅）を設置して、来たお客様に昔の小国町を感じてもらおう。最初は形にしていだけでも難しいと思うが、最初は1カ月に1回でも、徐々に駅＝小国の伝統を受け継いでいる方が増えていけば、定着するのではないかな。逆にこれが定着していけば、雇用にもむすびついていくと思う。

2、小国町の中のイベント団体の橋がけをする

小国町には、音楽、伝統、自然を活用してなど、様々な団体がある。しかし、実際は人手不足だったり、他のイベントと日にちが重なったりとばらばらに動いているため、なかなか集客ができなかったり、大きいイベントにしたいとできなかつたりという問題がある。

そこで、一度小国町の団体をリスト化して、その中でまたどのような活動をしているのか、団員数など細かく種別化して、協力できそうな団体同士で連携を取っていけば、さらに大きなイベントを作ることが出来るのではないかな。また、「小国町イベントマップ」を作って、いつどこでどんなイベントが開催されているのかが分かれば、お客様も来やすいと思う。

3、子供たちに小国の自然の楽しさを知ってもらう場所作り

これは私の希望でもあるが、小国町にありそうで無かった、アスレチックを作る。これだけたくさんの樹や川などに恵まれているのに、意外と町の子供たちは触れ合っていないのでは？

気軽に楽しく自然に触れ合えるのはアスレチックだと思う。子供の時に自然と触れ合えば、大人になってもその良さは忘れないのではないかなと思う。

人の流れ創造への提案

2015. 9. 9.

山口県庁

役場、観光協会

町内

こころのこころ

おにぎり(村)

フス力

Studio こま

CONNECT

情報共有



小国を元にするネットワーク

小国(国) 東郷(中) 女(高) 校(校)

年毎実施へ
年間イベントスケジュールの設定

イベントプログラム作り

問い合わせ窓口の明確化

コミュニティビジネスの活性化

- ・高齢者支援等地域福祉
- ・経済的自立・エネルギー自給

町外

緑のふもとと節力隊

インターシップ 法政大他

城学道城事業 早稲田大他

まち駅

道の駅

特産品販売

移住、定住化へ

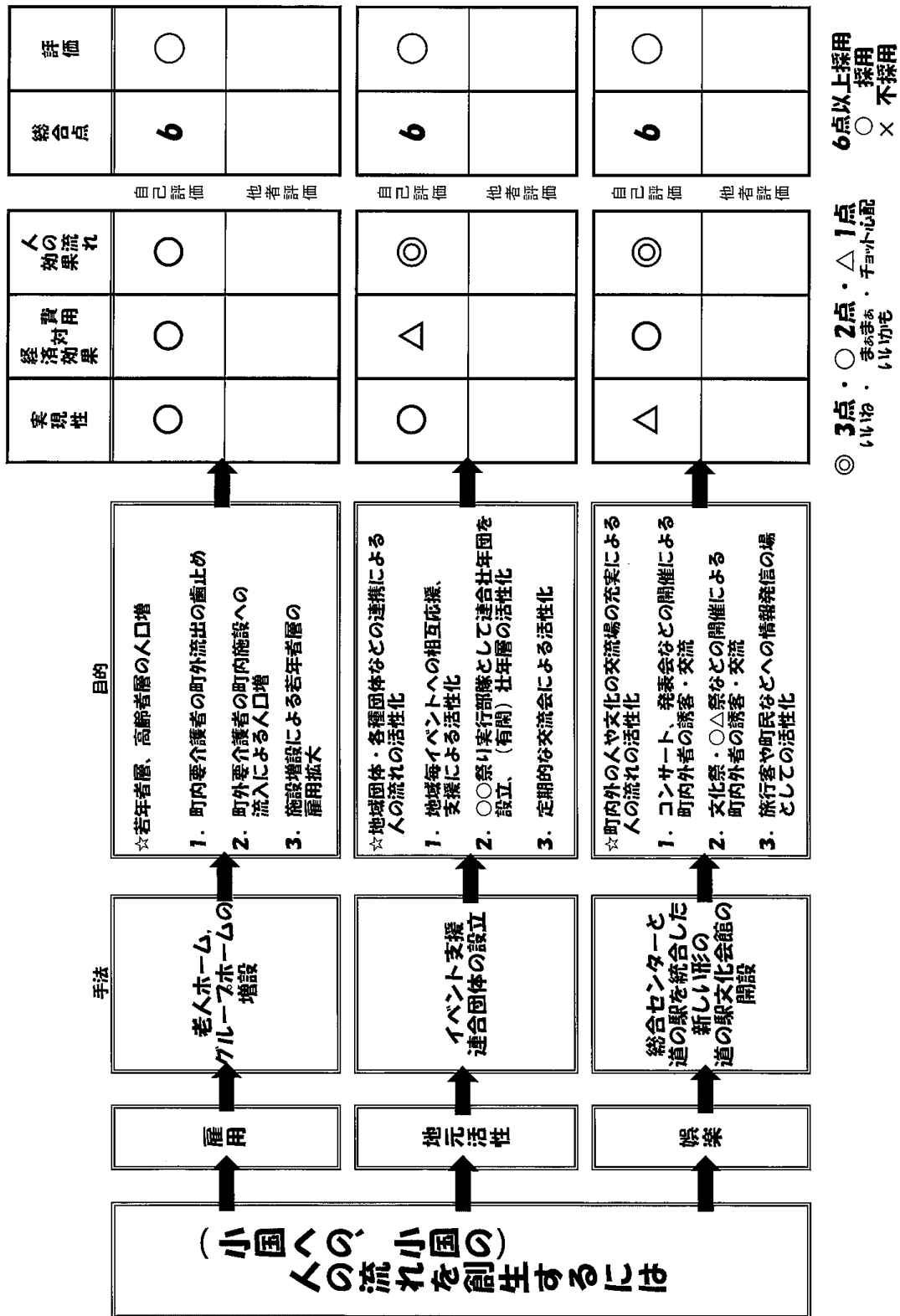
いこばおに

★ プログラム、コンテンツ作り

★ 助入交流プログラム

★ 小国ファン組織化のシステム作り

★ エネルギー自給 等 先進事例実験



結婚・出産・子育て部会

第1回	平成27年7月30日（木）	33
	@おぐに開発総合センター 保健相談室	
第2回	平成27年8月24日（月）	36
	@小国町役場 庁議室	
第3回	平成27年9月10日（木）	42
	@おぐに開発総合センター 集会室	

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第1回 結婚・出産・子育て部会 要旨

- 日 時 平成27年7月30日（木） 18:30～20:30
- 会 場 おぐに開発総合センター 3階 保健相談室
- 出席者 懇話会委員：宮原博通、工藤千穂、今絵理子、河内昭、金歩夢、舟山咲
オブザーバー：原田千鶴子、阿部英明
事務局：佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、廣瀬主任、渡部主任
- 概 要 講師紹介、自己紹介に続き、事務局より会議開催趣旨とまちづくりの基本的な考え方等について説明した後、宮原委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

宮原委員より、事前に各委員に配布していた、県が作成した「やまがた創生総合戦略（仮称）骨子（案）」に基づいて、話が進められた。

宮原委員

県骨子案の3Pに記載された4つの基本目標を家の柱に例え、この柱に囲まれている空間、家が小国町である。4本の柱にはそれぞれ共通点があって小国町を支えている。この家を訪ねてみたいと思われるような町を作っていかなければならない。

暗い雰囲気であれば人はこない。明るい雰囲気ならば人は来なくなる。おもしろい町、ありがたい町であればみんなが誇りに思う。

小国町総合計画にはこれからの町づくりのベースは何かということが書かれているが、これをどうやって実現していくか。何でもかんでも行政がやれるわけではない。町民のみなさんの力によって実現していかなければいけない。

日本は2010年をピークに人口減少社会となり、今までにない自然環境の中で生きていかなければならない。平成35年には小国町の人口は7,000人を切り、高齢化率も40%を超えてくるという試算が出ている。

人口減少、少子高齢化が進む中で、災害への対応に対する問題も出てくるし、保健医療費の負担も厳しくなってくるので、いろんな人の力を引き出していかなければいけない。

この部会では、委員の皆さんから小国町で抱えている課題に対する意識の共有を図りたい。皆さんから課題を出してもらって、その課題はこうやったら解決されるのでは？というところまでやっていきたい。

県骨子案の5Pについて、ページ上部の展開の方法にある、「山形ならではの」「山形」を「小国」に置き換え、また「やまがた結婚・子育て安心ライフサポートを推進」の「やまがた」を「小国」に置き換えて考えてみる。安心して結婚し、子どもを産み育てるために私はこういうことに注目したいということ委員の皆さんからブレインストーミング形式で出してもらいたい。

宮原委員からの説明の後各員から課題を付箋に書いてもらい、その課題を声に出して周りの委員に聞いてもらいながら大判用紙に貼る作業を行った。

各委員から出た課題等については以下のとおり

委員A

- ・休日に親が忙しいときに子どもを見てもらえる環境
- ・山形～新潟、新潟～山形に行く時には小国町を多く通るので、全国チェーンのすき屋やマクドナルドなどドライブスルーを造る。
- ・出産時に近場で産むことができない。
- ・バスを待ったり、憩い（ふれあい）の場がアスモに限られている。
- ・中学生の自転車通学ができなくなった。
- ・地区のイベントを増やす（大切）
- ・視界が悪い
- ・道の整備

委員B

- ・子どもが安心して遊べる場が少ない。
- ・両立できる環境の整備
- ・バスの回数が少なく不便
- ・子どもがお年寄りの自宅を訪問
- ・若者向けの服屋、若者向けの店が少ない。

委員C

- ・町コンあったらいいな。
- ・結婚の前に出会いがない。
- ・マスオさんかお婿さんがほしい女性多い
- ・コストコほしい。
- ・おもしろいイベントしたい。
- ・おしゃれなカフェバーもっとあればいい。
- ・シェアハウス

委員D

- ・余裕を持って働ける→仕事、収入
- ・子どもに優しい町
- ・経済的な安定→仕事
- ・子どもを安心して遊ばせることのできる場所
- ・子育てにかかる時間の確保

委員E

- ・あそび場、公園、運動場があるといいなあ～
- ・子育てサークルなど親子でのつながりをつくる。
- ・職種が選べるほどたくさんの仕事場がある。
- ・シェアハウスで共同生活
- ・仕事量の軽減、有休がとりやすい環境
- ・若者だけでなく、祖父母も子育てに参加
- ・男女が出会える場、イベント
- ・安心して出産できる環境

委員F

- ・まちの人、環境づくり
- ・若い人がふがいない。
- ・青少年時代に逞しさづくり
- ・よろず相談オフィス
- ・子どもを面倒みる仕組み
- ・企業間の連携
- ・仕事場の協力
- ・ワークシェアリング
- ・子育て情報の共有
- ・地区のコミュニティ意識
- ・江戸しぐさの本

- **その他** 部会の最後に今後の部会の開催日程について調整を行い、第2回会議を8月24日（月）、第3回会議を9月10日（木）に行うこととした。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第2回 結婚・出産・子育て部会 要旨

- 日 時 平成27年8月24日（月） 18:30～20:30
- 会 場 小国町役場 3階 庁議室
- 出席者 懇話会委員：宮原博通、工藤千穂、河内昭、金歩夢、舟山咲
オブザーバー：原田千鶴子、加藤康浩
事務局：佐藤政策企画室長、廣瀬主任、渡部主任

- 概 要 ・佐藤室長より
 - ・総合戦略における基本方針と基本的な方向
 - ・総合戦略・過疎地域自立促進計画 各施策等の整理
 - ・小国町地域創生総合戦略住民意識アンケートの実施状況について、概要の説明を行った後、宮原委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

宮原委員より資料に基づき部会活動のポイント、部会で出し合った課題解決のための活動サイクルについて説明があった。

その後、前回会議を振り返り各委員より感想を述べてもらった。

工藤委員

最初は、どんなことをするのかイメージがわからなくて前半は話しについていくのが精一杯だったが、後半はみんなが考えていることがどんどんでくると話しやすくなった。

ここに住みたいという環境を作っていかないと、いくら結婚、出産しましょうといってもなかなかつなげていけないのかなと感じた。

河内委員

出産と子育てはひとくくりに考えがちだが、結婚から出産と出産から子育てはそれぞれについて同じ見方をできないところもある。子どもを育てたい環境と子どもが求める環境が必ずしも一致しないこともあるので、どこで折り合いをつけていったらいいのか。

またアンケートにもあったが、小国町に求める魅力について小国町の外の人と内の人ではずれがあるので、それをどうしていったらいいか考えている。

金委員

自分の考えや親の話しを参考にして前回の会議で発表したけど、他の委員の意見を聞いてこんな意見もあるんだと思った。また、自分が出した意見について共有してくれる方もいて、すごく勉強になった。

舟山委員

自分は子どもや女性からの視点に重点を置いたけど、結婚になると外に行ってしまう人がいるということも知ることができたし、課題を出すことによって関連づけていって話しを広げ

ていくことを学ぶことができた。

その後、結婚、出産、子育てに関する課題解決への方策について、ブレインストーミング形式で提案が行われた。

出された提案については以下のとおり

SNS 関連

- ・地区のイベントの映像を youtube 等で流す。
- ・タブレット端末を高齢者宅へ配布し情報共有をはかる。
- ・youtube に「おぐにチャンネル」を解説する。
- ・face book に「おぐに」の公式ページを開設する。
- ・ワラビーマンのような” ゆるキャラ” が twitter で発信。

情報発信、FM局関連

- ・音楽祭をしたり、分野ごとのイベントをする。
- ・ラジオ放送をする。
- ・音大生に、幅広い層に親しんでもらえるテーマ曲を依頼する。
- ・コンサート、ライブなどの開催
- ・ミニFM局を開く。(酒田市のハーバーラジオのような)
- ・子育て情報の配信
- ・アスモとか中央通りとか、ある場所に行くといつもラジオが流れている。
- ・森の音楽会とか森の映画館とか
- ・TV番組に町ぐるみで出演。

ご当地魅力関連

- ・小国の昔ばなしを紙しばいやアニメにする。
- ・小国町の有名な「ゆうれい」や「ようかい」を使った何かをする。
- ・期間限定でいろいろな店を出店。
- ・ご当地限定グッズ
- ・ご当地アニメのようなものを放送。
- ・フリーマーケット
- ・山菜を使った、小さい子でも好んで食べられる料理やお菓子の開発。
- ・小国の特産品を使ったイベント開催
- ・国道沿いに小国の魅力！看板をたてる。
- ・小国弁、小国音頭がいつでも聞けるお店、道の駅。
- ・雪を利用して雪像をつくる。
- ・大量にふる雪を利用してギネス級の雪だるまを作る。

- ・各地域で行われているイベントを先取りして情報を流す。
- ・雪博物館とか研究所などを作り、「雪」をネタにする。

サポートシステム関連

- ・Uターン、Iターン者への職場のあっせん
- ・通学費の助成
- ・スポーツ施設の充実
- ・子育てパスポートが使える店が増えてほしい。
- ・男性の育休、子育てに時間をさける環境
- ・家族で移住できる場をつくる
- ・〇〇限定コンパ（託児所あります。低料金です。出会いあります。）
- ・文化面、体育（体力面）の拠点づくり

○ その他 次回会議については9月10日（木）に行うこととし、今回の会議で出された意見に基づいて当部会の方向性について整理することとした。

また第4回会議については10月5～7日で調整することとした。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会

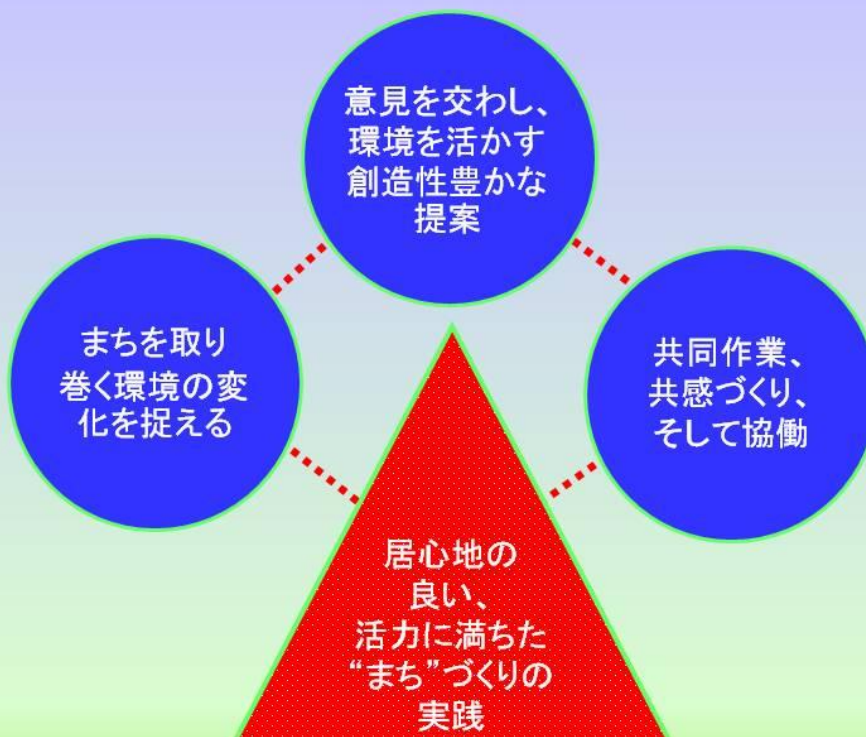
結婚・出産・子育て部会

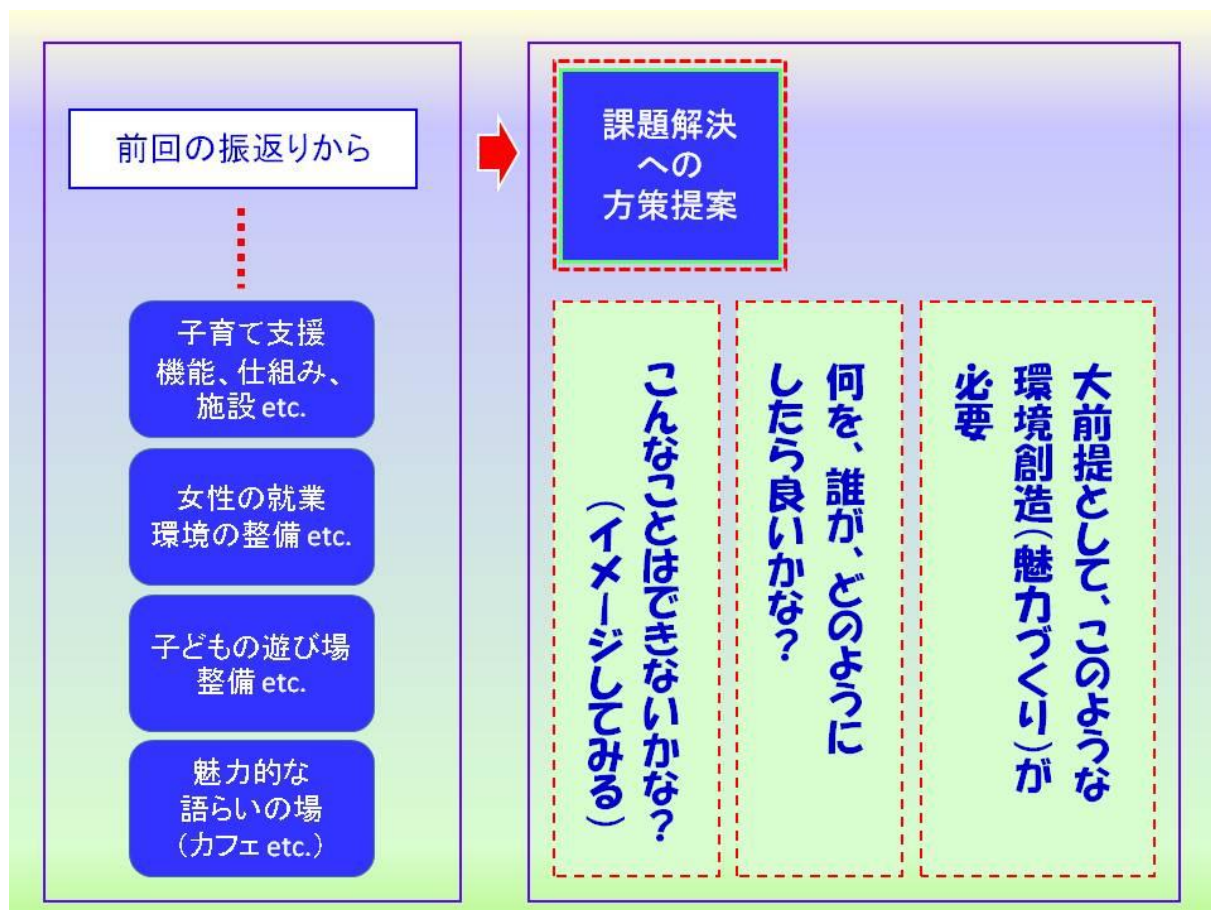
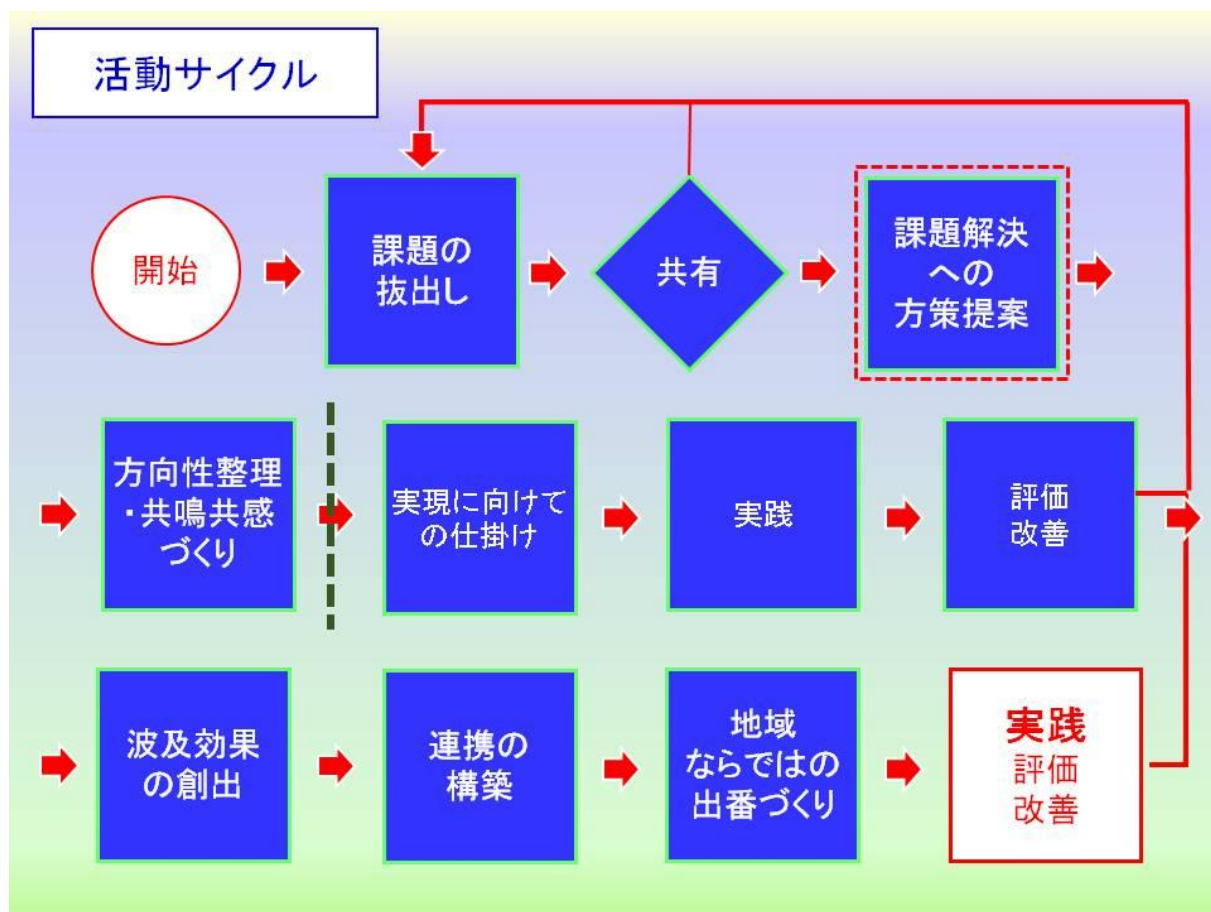
ワークショップ活動の2回目
・・・課題解決方策の提案

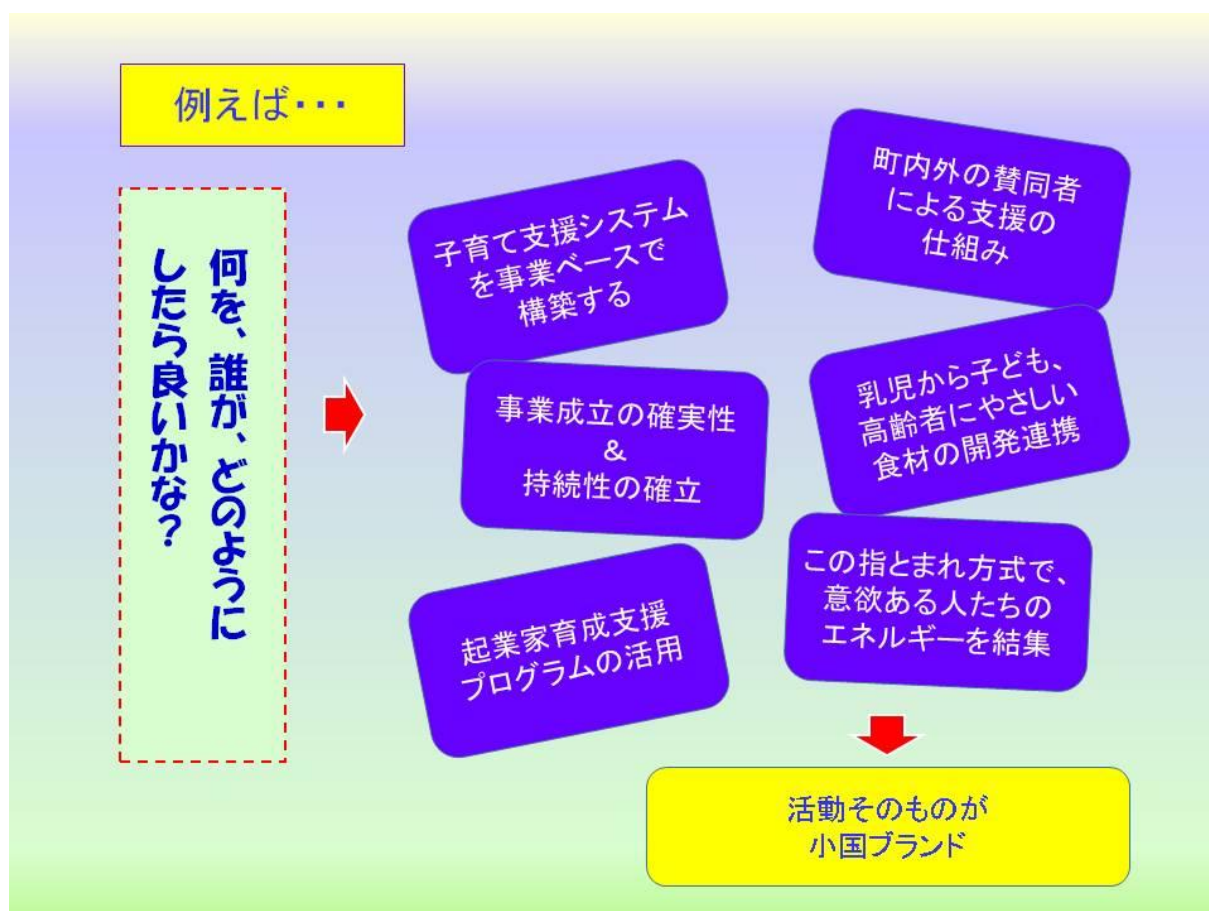
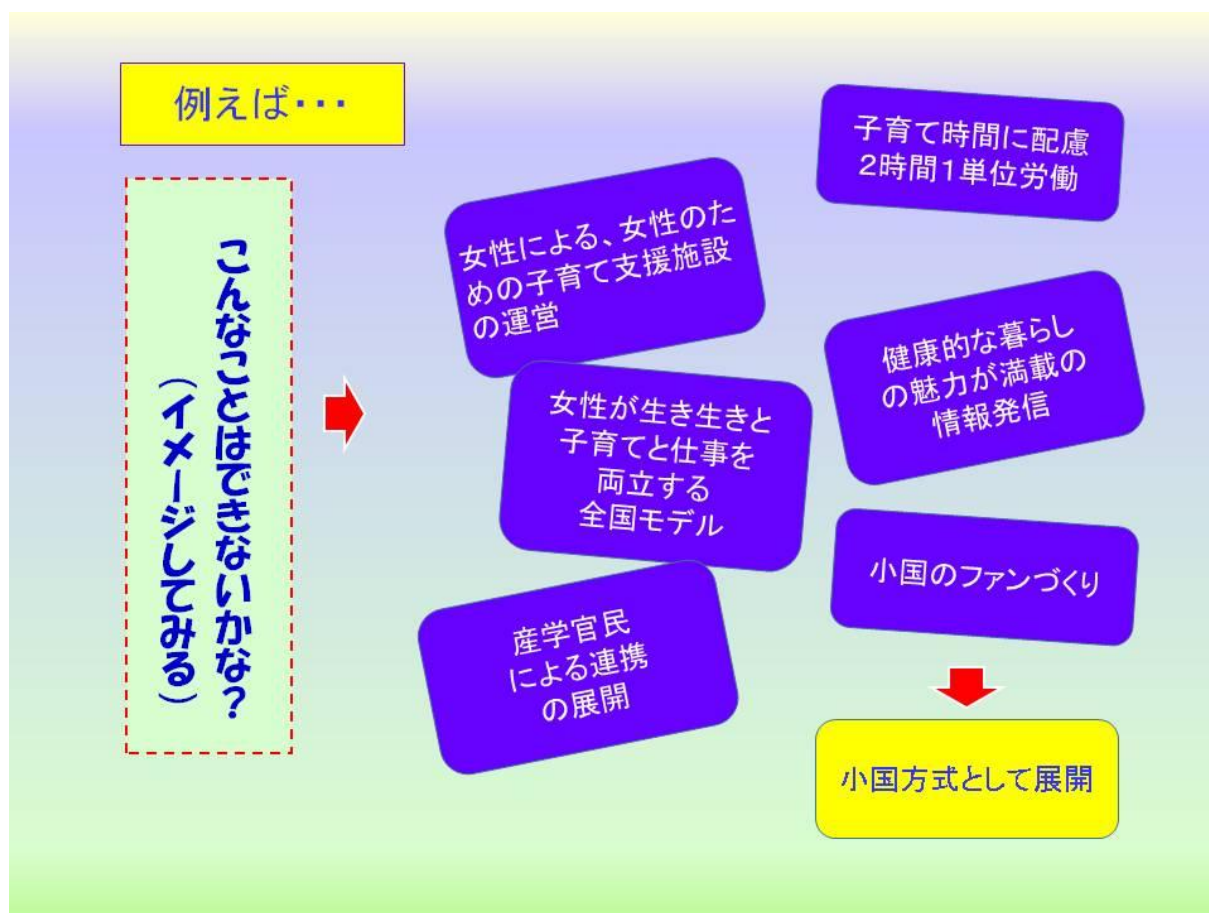
平成27年8月24日

地域環境デザイン研究所 宮原博通

部会活動のポイント







小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第3回 結婚・出産・子育て部会 要旨

- 日 時 平成27年9月10日（木） 18:30～20:30
- 会 場 おぐに開発総合センター 集会室
- 出席者 懇話会委員：宮原博通、工藤千穂、河内昭、今絵理子、金歩夢、舟山咲
オブザーバー：原田千鶴子
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、
廣瀬主任、渡部主任

- 概 要 ・小野主査より
・小国町地域創生総合戦略住民意識アンケートの実施状況
について、概要の説明を行った後、宮原委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

宮原委員より資料に基づいて前回の振り返りをしてから、今回は部会としての方向性の整理として多くの町民からの共鳴共感が得やすい支援活動とは何かについて話し合いを行っていくこととし、いくつかの例を挙げてから各委員に意見を求めた。

各委員からの意見等については以下のとおり。

工藤委員

- ・国道沿いのお店にて、農産物を使ったメニューを出したり、パンフを置く。
- ・小国の特産品を使ったものの販売。
- ・年代別にメニューの開発（食べやすさ、形、量など）
- ・高齢者の話しや昔話、知恵について聞く。
- ・（萱野峠）敷石堀りのイベントなどに参加して話を聞く、食事をする。
- ・新しい施設、例えば子育て支援センターに行ってみたい！と思える場所づくり。

河内委員

- ・SNSによる情報発信（双方向）。
- ・しゃくなげまつりで雪のすべり台を作り、子ども連れを呼び込む。
- ・絵や写真を趣味にしている人が立ち寄れる駐車スペース。

今委員

- ・たかきびうどん
- ・子育てセンターの活動映像をアスモなので上映する。
- ・おもしろCM（you tube）
- ・町中で竹とうろうを一斉に灯す。また、その風景を撮影した写真コンテストを開催する。
- ・ゆーゆの館内でフリーマーケットやワークショップを行う。そのイベント自体も出会いの場にする。

金委員

- ・外灯が少ない（町が暗い）感じがする。
- ・新しく企画するのも大事だが、まず小国町の交通整備（道路整備）をすべき。

舟山委員

- ・若者が多く利用するＳＮＳ（twitter）で情報拡散。
- ・ＳＮＳで町の口コミやイベント情報を伝える掲示板を開設する。

また、河内委員より、第１回部会の内容に関連して以下の意見が出された。

河内委員

- ・帰宅が遅くなっても安心して買い物ができるスーパー
- ・町区ごとに公園の設置を
- ・西松屋などの育児用品・子供服の店
- ・保育園や学校行事などに合わせた品揃えを町内のお店にお願いしたい。
- ・小児科の常駐
- ・町外の高校に通う生徒の通学方法の確保。（小国町に住んでいても、安心して通学できる体制）
- ・大学当の研究機関の誘致→「雪」の活用や研究。

宮原委員

町として町外の人を受け入れようとしたとき、なによりも小国の人が喜んでいろんなことをやっているという環境が、ゼロというのといっぱいあるというのでは外に与えるインパクトは全然違う。そういうことを伝えていくのがフェイスブックであったり町のホームページであったりする。小国の良さを伝えていく中で人のエネルギーが集まってくるし、そのエネルギーが小国町の課題を乗り越えることにつながっていくことになる。

小さな子の手を引いているお母さんの後ろ姿の写真、町の中のすてきな親子の関係、また近所の人の子育てをしているとか、そういった生の声や動きや写真など、そういったものを伝えていくことで小国はいいねということになっていくのだと思う。

最後にオブザーバー、事務局からの意見も求められた。

原田健康福祉課長

子育て支援センターの情報については、支援センターだよりで対象者である就学前児童が居る全戸に配ってはいいるが、町の子育て支援の状況が見えないという声もあるので、対象者がいない世帯への配布も検討したほうがいいのかなと感じた。

山口総務企画課長

他の部会で出た意見なども聞いて、それぞれの部会で出た意見を関連させていかないといけないのだろうということを感じた。

子供だけでなく親などみんなが楽しめるものをつくっていかないといけないのかなと感じており、今回出た意見の中でも実現可能なものはあるのではないかと考えている。

佐藤政策企画室長

いろいろなご意見が多様に出たのかなと感じており、それらを我々がどう受け止めていくかということだと思う。

その中で小国町ですでにやっていることも結構ある。SNS関連でフェイスブックも小国町ではやっているが、なかなか伝わっていないところもあるので、情報の発信の仕方についても考えていかないといけないのかなと感じた。

○ **その他** 次回会議については10月5日（月）に各部会と合同で行うこととした。

また、当部会での意見については代表して工藤委員に発表してもらうこととした。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会

結婚・出産・子育て部会

ワークショップ活動の3回目
…方向性の整理
共鳴共感づくり

平成27年9月10日

地域環境デザイン研究所 宮原博通

前回の振り返りから

町全体での
子育て見守り、
サポート体制・
体質づくり
⇒ 気風をつくる

日頃からの
町ぐるみによる、
コミュニケーション
の場づくり

「結婚・出産・子育て」支援プロジェクト

方向性の
整理、
共鳴共感

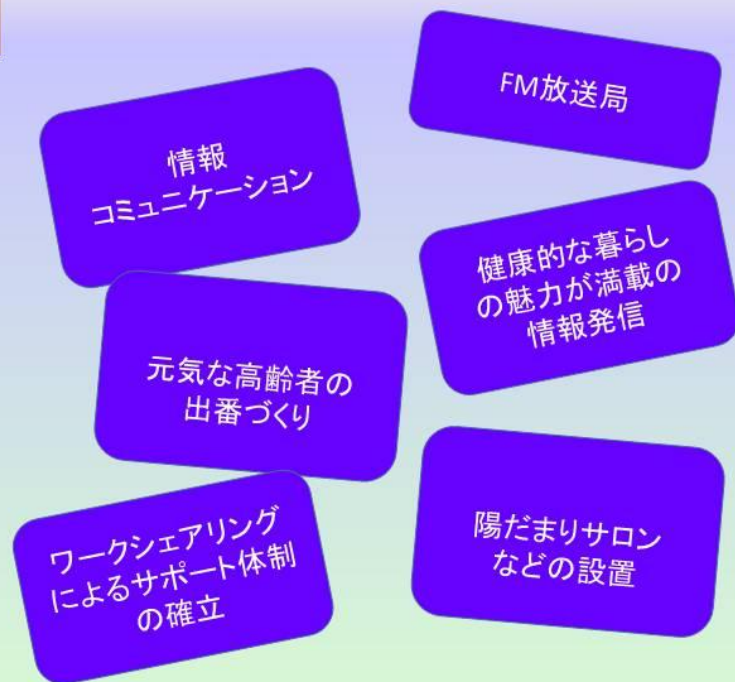
向かう方向の
絞り込み

町民の期待に
応える取組みとして、
先ず最初の一步として
踏み出す活動は？

多くの町民からの
共鳴共感が得やすい
支援活動とは何か？

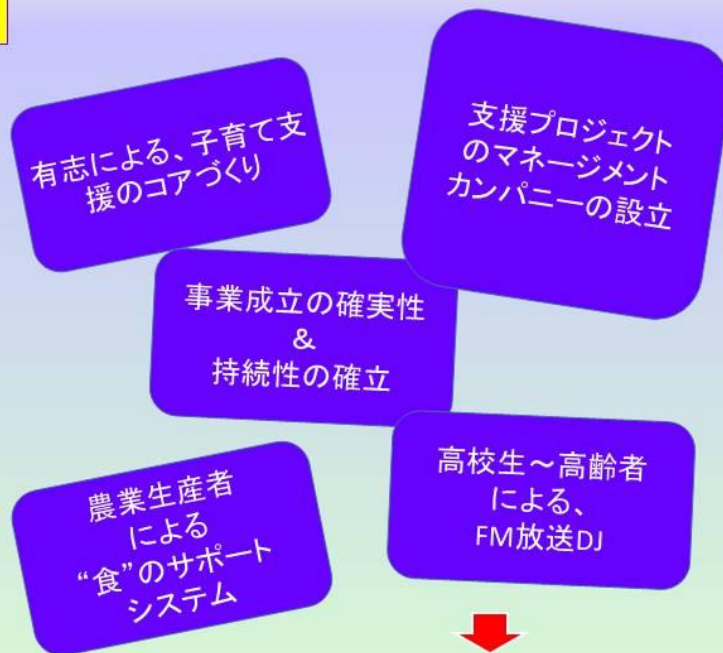
例えば・・・

共鳴共感が得やすい
支援活動などは？
(イメージしてみる)



例えば・・・

何を、誰が、どのように
したら良いかな？



活動そのものが
小国の魅力づくり

地域創造・暮らし安心部会

第1回	平成27年8月 6日（木）	47
	@おぐに開発総合センター 集会室	
第2回	平成27年8月25日（火）	52
	@おぐに開発総合センター 保健相談室	
第3回	平成27年9月14日（月）	59
	@小国町役場 庁議室	

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第1回 地域創造・暮らし安心部会 要旨

- 日 時 平成27年8月6日(木) 18:30～20:30
- 会 場 おぐに開発総合センター 2階 集会室
- 出席者 懇話会委員：安部茂、舟山靖恵、佐藤靖彦、金野やよい、渡部正仁
オブザーバー：後藤町民税務課長、伊藤訪看ステーション所長、菅野建設技術主幹
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、廣瀬主任、渡部主任
- 概 要 事務局から総合戦略の概要と懇話会の主旨の説明、座長の法政大学 関司先生の紹介、各委員から自己紹介をした後、事務局の進行で話し合いを進めた。

○話し合い要旨(内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。)

佐藤室長より、関司先生から提示された話し合いの進め方の概要について説明し、次の項目について各委員から発言いただいた。各委員からの発言は別紙のとおり。

＜話し合いの項目＞

- ①皆さんの家族構成を書き出してください。また、それぞれに10歳加えてください。
- ②①を見ながら、10年後の自分、家族の有り様について、印象を整理してみてください。
- ③お住まいの集落、地域、また町全体がどうなっているのか、どうなってほしいか、感想をお願いします。
- ④よりよい10年後を目指して、この部会で何を話し合っていくのがよいでしょうか？キーワードまたはキャッチフレーズを書き出してみてください。
- ⑤本日の感想、次回への抱負

※時間の都合で、今回は③までを話し合い、④以降について次回まで考えてきてもらうこととした。

○その他 第2回部会を8月25日、第3回部会を9月15日で調整することとした。

なお、後日関司先生と協議し、第2回部会を8月25日に、第3回部会を9月14日に開催することとした。

「10年後のあなたの家族、地域はどうなっているか？どうなってほしいか？」

①皆さんの家族構成(年齢)を書き出してください。また、それぞれに10歳加えてください。

②①を見ながら、10年後の自分、家族の有り様について、印象を整理してみてください。

(裏面に続く)

③お住まいの集落、地域、また町全体がどうなっているのか、どうなってほしいか、感想をお願いします。

④よりよい10年後を目指して、この部会で何を話し合っていくのが、よいでしょうか？
キーワードまたはキャッチフレーズを書き出してみてください。

⑤本日の感想、次回への抱負

	舟山委員	安部委員	佐藤委員	渡部委員	金野委員
① 皆さんの家族構成を書き出して下さい。また、それぞれに10歳加えてください。	①夫 54→64 ②私 52→62 ③夫の母 78→88 ④長男 22→32 ⑤長女 20→30	自分:71 母:97 弟:60 :81	①自分 48才→58才 ②妻 49才→59才 ③長男 21才→31才 ④二男 19才→29才	父80→90 妻53→63 長男18→28 次女17→27 自分50→60	金野 伸(40)・・・父80、母70 金野 やよい(37)・・・父70、母70
②	①を見ながら、10年後の自分の家族の有り様について、印象を整理してみてください。	①体力・気力があれば働いていてもいいし、好きな山仕事(マタギや山菜採り)をしても良い。 ②フルタイムではなく、できることを手伝えたら。 ③あまり頑張らずに、自分のことはできる程度で元気でいてほしい。 ④家庭をもって元気で働いてほしい。(小国に帰ってきてくれるならなおよし) ⑤④と同じ。 地域は、小玉川は高齢化でわらび園などの人足が成り立っているのか疑問。	①と②は、現在別居の母が健在であれば、仏壇もあるので、いやいやながら老人グループ同居しているのではないかと。会社は長男になんとか承継しておきたい時期だ。 ③と④は、「男」なので、なんとか「嫁」をもらってほしい。2〜3人くらいは子供を授かってほしいと願っています・・・。たぶん長男は町内に別居、二男は遠くとも置賜内が会社から1時間程度のところに暮らしてほしい。 ※会社自体は今後の戦略で町外に移転も有るかも？	父 90になるが、バリバリ農業をしている妻 63、農業の手伝い 長男 28、外国へ 長女 結婚して子供2人？できれば残してほしいが、 自分 自給自足の生活？今年から集落営農に取り組んだり、林業の勉強なども進めている。地域づくりや学校存続などの取り組みも。	夫婦働き盛り ・定職について安定を得ているか、非常勤・兼業に生活か？ ・子供がいるとすれば保育園〜小学生？ ・出費は今以上、収入は変わらないか？それ以下。
③	お住まいの集落、地域、また町全体がどうなっているのか、どうなっているのか、どんな願いがあります。	集落⇒戸数減になっていると思われるが、助け合うことで現状維持。 集落営農が進む？ 地域⇒北部地区全体で1つ何かをやるという活動があれば、地域の人たちが活動にのれる。 町⇒小国町といえれば〇〇という目玉が出来てほしい。	私の生活している南部地区は「エネルギーマー供給」のコア。水力発電所が3ヶ所有り、観光交流施設も現存しているのので、今後10年後のスパンであれば就業の場としては残るのではないかと？残ってほしいと思う。 ただし、地元で働く労働者(若年の精算人口)減少していけばそれらを継続していくこともやがては不可能になるのかもしれないし、人口が減少していけば除雪の体制かなり変化してしまう。小国町全体もそうだと思う。それぞれの地区で、それぞれの家庭であととりをどうするかを議論しないとダメだ。 ○しつかりと儲かるシステムの農林水産業の確立と見直しが必要 ○「小国町オリジナル」の旅行会社で、プランを小国側がつくる。 ○学校産業ビジネス ○研究所などの設置	現状のまま、楽しくすごせる所。	・小国町親友会金目・沼沢班 (10年後)半分以上が引退、今のメンバーのみでは維持不可能、シカ・イナシ等の増加 →(希望)若手メンバーが加入(継続的に)、他班との合同巻狩(Butt山の地形わからず獲れない？) ・森林セラピー事業 →(希望)セラピー基地返上、名前にしづらなく地域が好きなことをできる。 ・ここ掘れ和ん話ん探検隊 (10年後)メンバー半分以上脱退？ →(希望)入れかわりつつ60歳以上を中心に組織 ・子供 →生活の一部に森や山がある。

④	よりよい10年後を 目指して、この 部会で何を話 し合っていく のがよいでしょう か？キーマン またはキャッチ フレーズを書き 出してくださ い。			もともと安心な小国町だと感じています。ただ社会変化や多くの情報によって今の私たちがその良さ、安心な部分を見ずして気づかないでいるのかもしれない。自然や風土、老人も安心な車の多い小国町、新たな何かという元々の良さを「再確認」して後世に伝えられるような話し合いをしていきたいと思っています。 ①結婚・子育て・出産 ②生活・仕事 ③老後・地域の連携 キャッチフレーズは？ 総合戦「略」 た たかいを略すること	無理をしない。	
⑤	本日の感想、次回への抱負			様々な方々のご意見をうかがえて勉強になった。 現状ベースで話をする。		

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第2回 地域創造・暮らし安心部会 要旨

- 日 時 平成27年8月25日（火） 18:30～20:30
- 会 場 小国開発総合センター 3階 保健相談室
- 出席者 懇話会委員：図司直也、安部茂、舟山靖恵、佐藤靖彦、金野やよい、渡部正仁
オブザーバー：後藤和人、伊藤優子
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、小野政策企画担当主査、
廣瀬主任
- 概 要 ・佐藤室長より
 - ・総合戦略における基本方針と基本的な方向
 - ・総合戦略・過疎地域自立促進計画 各施策等の整理
 - ・小国町地域創生総合戦略住民意識アンケートの実施状況について、概要の説明を行った後、図司委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

図司委員

第1回会議は、所用により欠席したため、佐藤室長に会議を進めていただいた。懇話会という何を話したらいいか分からないというところもあるので、自分のことから話しをしていただき、それから家の話し、そして小国町の話しと広げてもらった。かなりいろいろな話しを出してもらったと伺っているが、あらためて、自己紹介も兼ねて第1回会議のを振り返って各委員から感想等について発表していただきたい。

安部委員

コバレントを早期退職して今は農業をやっている。会社は定年になれば終わりだが、農業は体が続けばずっとやれる。給料をもらうことだけが仕事ではない。いま個人でやっていることを法人化することも考えている。

それから、守る努力と変える勇気が大事だと思っている。変わらないということはそのことについてみんなが努力しているということだと思う。自然についてもそうだが、変えちゃいけないところはやっぱり変えないでずっと残していくべきだが、昔とずっと同じでいいかといったらそうではない。必要な場合には新しい方向にすすんでいくべき何だろうなと思っている。

金野委員

もともと小国町の人間ではなく、緑のふるさと協力隊を経て小国町に住むようになり、現在は町外に住んでいるが、仕事については小国町のNPO法人につとめている。NPOでは小国町は森林が多いのでそれらの町にある資源を利用して交流人口を増やせないかということで小国町から仕事もらってやっている。

この会議で意見を言えばなしでいいのか、それに対する解決策なども出さないといけ
ないのか、どうなんだろうと思っている。

→事務局

皆様から出されたご意見に対して、行政がどのように具体的な対策をしていったらいいか
ということについてご意見をいただけたらありがたい。

佐藤委員

現在は農業をやっている。町にも色々お願いして補助事業などをやっているが、お金があ
るうちは続けられるが、打ち切られると続けるのが難しくなってくる。農業なんかはそれが
てきめんでそれに振り回されているところあるので、長期のスパンで計画を立ててもらうと
助かるし、計画を立てても実行になかなか移せないというのが今の実感である。

舟山委員

高齢者施設で働いており、夫は現役のマタギ。現在のマタギは54才の夫が中堅であり、
熊を捕ってきて運んで来るのが大変。また、鉄砲を持つにもお金がかかるし、放射能の影
響もあるので、このままでいけばマタギ文化はどうになってしまうのかという心配がある。

また、高齢者施設で働いていることもあり、小国町の高齢者に対する心配もある。

図司委員

この部会では、皆さんが生活で感じている不安、不満をあぶりだしていくことが期待され
ていると思われるので、どんどんそういった意見を出してもらって、できれば次回の会議で
不安や不満に対する施し、手当、その優先順位、実行ベースに乗せる話し等をしたいと思っ
ている。

今回の会議の議論については、まず主体を（高齢者、現役層、子育て層、若年層）とし、
それぞれの主体が感じていると思われる暮らしの中での不安や課題について皆さんに出して
もらいたい。

安部委員

北部の70～80代の人にはどんなことがあってもいまのところで死にたいと思っていると
思う。苦勞してきているので、暮らしのなかでもそれほど不安を感じていないのではないかな。

40～50代の人になるとまた話が違ってくると思う。土地、家、親があるのでここにい
るが、親が居なくなれば離れることもあるのではないかな。

若年層になればまた違ってくる。地域行事への参加状況については参加しているというよ
り義務で参加しなければいけないというような感じだと思う。ただ、最近開催された北部地
区の盆踊りでは予想以上に若い人達も協力してくれた。

現在使用していない北部小学校に子ども達を学校に1週間滞在させて、親やじいちゃんば
あちゃん達はこんなことをやっていたというのを教えるのも、地域への愛着を促す意味で一
つのやり方かもしれない。

金野委員

以前住んでいた白沼地区の小中学校は統合されたが、学校があったときは歩いたり自転車で登校する生徒と地域の人との会話があったが、現在はスクールバスなので子どもの姿が見えなくなったのは寂しい。

教育委員会でやっているサマーキャンプ等の企画の委員をやっているが、町中心部の子ども達の参加が多く、周辺部の子ども達はあんまり参加してこない。それはキャンプに参加しなくても自分の住んでいるところにそういう環境があるということだと思うが、町中心部の子どもはやっぱりこういうイベントに参加しないと川遊び等自然とふれ合う機会が無いのかなと思う。

佐藤委員

20代中盤より若い若年層の定住が少ないのが不安要素かなと思う。また、同年代との出会いが少ないこと等への不安あるのではないかな。

20代中盤から40代中盤の世代は子どもを育てる手間と親との関係性、特に乳幼児、就学前の子どもを抱えたお母さんは医療に対する不安があると思う。

40代中盤から60代ぐらいまでの世代は、自分の次の世代の仕事の場、暮らしの場に対する不安、どのように世代交代していくかという不安があるのかなと思う。

65才以上から79才ぐらいの世代は小国の中で一番元気だと思う。なぜなら年金があるし、雪に対しても除雪が整っていない時代を過ごしてきたので、耐性があると思う。

それ以上の世代は、元気な方もいらっしゃるが、老人だけの世帯は災害が起きたりしたときのことを考えて、その地区の中で情報共有などどういった関わり合いを持っていくか考える必要がある。

渡部委員

東部地区は高齢者が6割ぐらい65才以上だと思うが、70才ぐらいまでは元気だがそれ以上の年代にとってはやっぱり雪は大変だと思う。どの家に一人暮らしの高齢者がいるかということを把握している人は結構少ない。行政にそういったデータがあるなら提供してほしい。

自分より上の現役層はほとんど農業に従事しているが、儲からなくても暮らしていけるぐらいは収入がほしいと思っている。

地域に学校は必要だと思っている。地域でいらないといえ別だが、必要と思われているうちは残してほしい、

若年層については、地元に戻ってきている人達なので気持ちが強い。もっと増えてほしいがあまり帰ってこない。

舟山委員

学校が無くなると親はなかなか集まる機会が無くなる。学校が無くなるまでは、子ども達は地域のみんなに育てられたし、大きな子が小さな子の面倒をみたりしながら長い距離を通学していたが、今はそういう光景が見られなくなった。

子育て層については、私の職場ではほとんどの女性が3人の子どもを産んでいる。そういうがんばって子育てをしている人達を見ると何か支援策があったらいいなと思う。保育時間は伸びているのでいいことだとは思う。私の時代は子どもが生まれると親が仕事を辞めて孫の面倒を見てくれた家が多かったが、今は自分の親が働いているということが多くて、孫の面倒を見てくれるということがあまりないので、今の子育て世代は大変だと思う。

小国町は一人暮らしの高齢者が多く大変だと思う。周辺部は移動販売車が来てくれるので買い物はそれなりにできると思うが、中心部の方からは買い物が大変だという声を聞く。

私の母も一人暮らしだが、回覧版や広報を届けたりするのも大変だと言っている。

図司委員

今の話を聞くと世代間のつながり、組み合わせで考えるとなかなかうまく回らないというものが結構あるのではないかな。また、見えてないものがたくさんあるのではないかな、たとえばスクールバスや学校が無くなって、子ども達だけで無く親同士や親と子どものつながり方もかわってきているのではないかな。また家族内でもこれまで2世代、3世代でカバーしていた介護や子どもの世話などについてもだいぶ構造が変化してきている。

一方、若い世代も地域行事などに関わってくれるといった前向きな意見もあった。

今の話を踏まえて、各委員から自分はこう思った等の意見を出してもらいたい。

金野委員

高齢者の人でも70代くらいの体が動く人は一人暮らしになっても、除雪をしっかりとやっているという印象。家族がいる家でも除雪はおじいちゃん、おばあちゃんがやっていることが多く、自分と同じくらいの年代の人と雪の話しをしても話しが通じないこととかあって、若い人達でも結構雪いじりをしていないという印象だ。

安部委員

北部地区では、一人暮らしのおばあちゃんの家を除雪なんかは近所の人がやってくれたりする。一人でやれるところはするけれども、軒下を除雪などは1週間に1回除雪機でやりしている。そういった付き合いがあるので一人でも動けるうちは暮らしていける。

図司委員

高齢者の一人暮らしの除雪を近所の人がやっているとのことだが、比較的若い世代の委員の皆さんはその辺どうか。

渡部委員

東部地区の家もだいたい除雪機をもっていて、除雪作業自体はそれほど労力を使わずにやれるが、若い人たちで仕事で除雪に行っているひとも結構いる。忙しいときは自分の家の除雪もできていない場合もあるので、そういった場合は隣近所の除雪まで手が回らないということはある。

高齢者が除雪することで認知症の防止になったり隣近所との情報交換の場になったりすることもある。

佐藤委員

10年ぐらい前は除雪作業が原因でお亡くなりになった高齢者もあったが、近年はシルバー人材センター等で除雪をしてくれる制度があるのでそういった事例はほとんど無いと思う。

大雪が降るところで暮らしていることの連帯感みたいなものもあると思う。

図司委員

除雪に関する不安をフォローし合える体制、たとえば行政から独居老人宅の情報提供があったりとかすれば動きやすいという話もあった。

80以上の方への地域の構えについて、各委員の考えをお聞きたい。

佐藤委員

民生委員を通じて、見守りが必要な老人宅を地域で把握しておく方法もあると思う。

事務局

健康福祉課で、福祉カルテという高齢者の情報をまとめたものを作成しており、警察などと情報共有を行っている。

福祉カルテは民生委員を通じて作成しているので、民生委員は地域の高齢者世帯については把握していると思われる。

渡部委員

福祉カルテなどの情報もあるが個人情報の関係もあり見せてもらえないところもあるので、地域で高齢者世帯の情報を把握している人はほとんどいないと思う。

舟山委員

民生委員であったとしても、用も無いのに高齢者世帯に行くのは抵抗があるという人もいる。ある自治体ではヤクルトを配りながら見守りに行くというところもあり、用事があれば行きやすい。確かに個人情報の縛りがあるので、民生委員に頼らざるを得ないのではないかな。

図司委員

和歌山県では、訪問する用事として広報誌を持って行って、広報誌読みましたか、内容分かりましたかなどと聞きながら様子を伺う取り組みをしている自治体もある。

それから、子育てと親の介護の両立について感じているところがあればお聞きたい。

舟山委員

私の家はおじいちゃん、おばあちゃんが元気なうちにこどもが成人になったのでよかったが、これが早くおじいちゃん、おばあちゃんが介護状態になっていけば、いちばん子どもにお金がかかる高校、大学のときに介護しなければならないという経済的負担の問題が出てくるのかなと思う。

金野委員

私達夫婦は長男、長女ではないので今のところ親の介護はしなく体もいいのかなと思っています。

図司委員

先ほど、若い世代が盆踊りに多く参加下という話があったが、年齢はどのぐらいなのか。

安部委員

20代ぐらいだが、予想よりも多く参加してくれて手伝ってくれた。各地区に公民館があり、その地区ごとに役割分担を決めて、あとは公民館長が声かけをした。

金野委員

白沼地区は、30～40代の子育て世代は盆踊りや運動会などの子どもが関わる行事は企画から携わっていて、60～70代の世代はあまり関わっていなかった印象だ。

舟山委員

熊まつりには地元から出ていった子ども達も嫁を連れて手伝いに来てくれたりするので、熊まつりは継続していくべきイベントであると考えている。

子どもには、手伝いに来るもんだぞと言っている。

安部委員

北部地区での盆踊りでは、北部振興協議会の役員単位でやると小さい公民館などは入らず、手伝いに来られないので、公民館とかそういった単位でやっている。

公民館の役員になっている人しか来ないのではないかとも思ったが、名簿に名前の無い人でも来てくれた。高校生も踊ってくれ、踊っている人のほうが見ている人より多かった。

渡部委員

昔は東部地区各地で盆踊りをしていたが今は2地区だけとなった。盆踊りは帰ってきた人が段取りをやる仕組みができていて、70ぐらいの人の参加はあまりない。

佐藤委員

若い人がSNSで情報を広げる力はすごいと思う。ただ若い人は一回つまずいたりしかられたりすると来なくなる。

図司委員

町中心部と周辺部でだいぶ暮らしぶりや雰囲気が変わってきているという話があったが、こちらのエリアで足りない部分を別のエリアでサポートしていくなんていうことも出てくるのかもしれない。

オブザーバーから感想があればいただきたい。

後藤町民税務課長

私は町中心部に住んでいるが、委員の皆さんのところとは環境が違うなあと感じた。消防団に入る若い人も少なく、つながりが薄くなっているなので、周辺部のつながりの良さの話を聞いてうらやましいと感じたし、中心部でもそういったつながりを求めていきたいと感じた。

伊藤訪問看護ステーション所長

今日の会議に参加するに当たって、小国町の現状に町民の皆さんはもっと不満や不安を

持っていると思っていたが、地域でのイベントなどの話を聞いていると意外と小国も捨てたもんじゃ無いと感じた。私は高齢者に携わる仕事をしているが、高齢者の一人暮らしの人は確かに不安はあるけど意外と生活できている人が多い。メールを使って身内の方と連絡をとっている人もいる。調べれば本当に心配な高齢者はほんとに一握りだと思われる。

小国で暮らしていきたいと考えている方の側面からサポートしていく体制づくりが大事だと感じた。

関司委員

アンケート結果について、一般単純集計のＱ１０生活環境の満足度をみると、どちらともいえないと回答した割合が４割から５割という選択肢が結構多くあり、今日の委員の発言からもそれを裏付けるものが結構あった。行政が支えていかなければいけないもの、地域でうまくやれているものの整理が必要と思われる。そういった整理がうまくやれていけばこの割合ももう少しいい方に動くのではないかな。

最後に今回の会議での感想を各員よりいただきたい。

安部委員

自分がどう生きていこうかあまり真剣に考えたことはなかったが、自分の生まれ町だし、これからの人生についてどう楽しく過ごしていくにはどうしたらいいかももう少しよく考えていこうと感じた。

金野委員

私自身は町外に住んでいて、分からないところたくさんあるが、今まで見てきたことで話せることもあると思うので、またよろしく願いいたします。

佐藤委員

東京は出生率、待機児童の数字は悪いのに若者が多いのは働く場の問題だと思う。小国町のいいところを青年層や若年層にその価値を再認識してもらいたい。新しいものを作るより、手薄なところを補強していくことに重点を置いていくのがいいのでは無いかと感じた。

渡部委員

参加していろいろな情報が得られて良かった。

若い人は打たれ弱いかもしれないが適応力はあると思うのでそんなに心配はしていない。

舟山委員

何かをやろうという若い人もいるし、南部地区を始め周辺部はまとまりあっているなと再認識した。逆に中心部のほうが心配だと感じた。

- **その他** 次回会議については９月１４日（月）に行うこととし、第４回会議については１０月１～７日で調整することとした。

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 第3回 地域創造・暮らし安心部会 要旨

- **日 時** 平成27年9月14日（月） 18:30～20:30
- **会 場** 小国町役場 3階 庁議室
- **出席者** 懇話会委員：図司直也、安部茂、舟山靖恵、佐藤靖彦、金野やよい、渡部正仁
オブザーバー：後藤和人町民税務課長、伊藤優子訪問看護ステーション所長、
菅野享一建設技術主幹
事務局：山口総務企画課長、佐藤政策企画室長、廣瀬主任、渡部主任
- **配布資料** 小国町地域創生総合戦略策定のための住民等意識調査の結果について
- **概 要** 佐藤室長からアンケート結果の概要について説明した後、図司委員を中心に話し合いを進めた。

○話し合い要旨（内容に応じて再構成したため、実際の発言順とは異なります。）

図司委員

前回の議論を私なりにまとめると、地域創造の面ではマタギ文化や盆踊り等の地域行事の話し、暮らし安心の面では除雪や高齢者の買物・見守り、子育てに関するサポート体制などの話しがあったと思う。これらに共通する課題として、若い世代へのバトンタッチやそれぞれの世代が集まる場などがあげられた。今日はこれらの課題に対してどういう手当てができれば良いか、また地域や家庭が何をどうすれば良いかについて考えを聞きたい。

アンケート結果の印象なども含めて、まずは一巡話しを伺いたい。

金野委員

町に対する愛着の部分は、大体このくらいだと思う。以前に小国中学校で話したとき、中学生の半数は町内に残りたいと考えていた。「一度出て帰ってきたい」と考えている生徒が一番多かった。私は、自分の町しか知らないというのは不安があると思うので、「一旦は外に出たほうが良い」という話しをした。

舟山委員

9ページQ10の医療・保険・福祉の満足度は、町内で出産できないことや、子供の急な病気に対応できないというのが大きいと思う。自分も冬の出産だったので不安があった。鉄道・バスの満足度については、町外の高校に通うとき米坂線の本数が少なく大変なのだと思う。

佐藤委員

アンケート結果は全部連鎖していると思う。今後の居住意向を見ると、40代で住み続けたい人が4割。地域づくりへの参加意向も「頼まれれば参加したい」が大変多い。親がそういう考えなので、中高生もそのようになると思う。若者の定住のキーパーソンはその親。次の世代が自然な形で町に残るようにするためには、親の世代がしっかり自分の子に情報発信する必要があると思う。

安部委員

中高生の意向が一番知りたかった。自分が中高生の頃は、長男長女は家に残るものと教えられた。そのため、家から通える仕事を選んだ。人口が保てたのは、「家」というものを中心に考えていたから。一方アンケート結果を見ると、今の中高生は、都会を知っているのに、それでも「暮らすのは小国」と答えているのだと思う。中高生が「遊ぶ場所」ではなく「にぎやかで活気のある町」を望んでいるのは、とても重要なことだと思う。

渡部委員

アンケートはどうしても聞き方によって結果が変わる。小国の人はまじめなので、良く答えてしまうところがある。そのため、これ自体についてコメントするのは控えたい。

「地域」の範囲をどう考えるべきなのかわからないが、自分としては、自分の地域である東部地区でやるべきことをやりたい。今年度は高齢者支援事業に取り組むこととしており、町にも協力してもらえる予定なので、これを契機に地域づくりを進めたい。

関司委員

20 年後、30 年後を見据えたとき、どういう人がどのような形で小国に住んでいるとおもうか。または、住んでいてほしいか。

金野委員

「外から多くの人を訪れて、にぎやかな町」というのがキーワードとして出てきているが、自分がかつて住んでいた徳島の上勝町はまさにそうだった。ただ、外から来た人が必ずしも地元の人と仲良くなっていなかった。外からの人だけではダメで、移り住んだ人もその場に興味を持って自ら吸収してくれれば、その場の良さは残ると思う。外からの人が入り込めるような良い雰囲気が大切だと思う。

舟山委員

子供が帰ってくるのが一番だが、本人が納得して帰ってこないといけない。自分も 2、3 年外に住んで小国の良さがわかった。帰ってきてほしいという働きかけは続けたい。

東部地区を見ると、色々な人を受け入れる土壌がある。小玉川ももっと受け入れればよいのにと感じたこともあった。

佐藤委員

ほど良く外の人に来るのが良い。結婚などで転入してくるのは歓迎。安部さんの話を聞いてはあったが、家というものがなくなると、伝統もなくなると思う。外から人が来て刺激を受けるのも重要だが、半数以上が地元というのが希望。

安部委員

生まれたところだからという理由でも、雪が好きだからでも、山が好きということでも良いので、「小国が好き」という人が住んでいる町になってほしい。

渡部委員

自分は媚なので、町に対する愛着という感覚はない。ただ、住んでいるからには楽しくし

たい。だから色々やっているし、子供たちも地区の行事に誘う。そうすると、なにか用事がない限り参加する。親が楽しんでいれば、良い地域に成るのではないか。

図司委員

住んでいる人の個性の束が町であり、ベースは家だと思う。子供たちとの向き合い方を考えたとき、家でやれること、地区でやれること、町でやれることなど、どのように考えるか。

金野委員

住んでいる人の半数以上が地元出身というのは、健全だと思う。仕事はなくても、起業という発想もある。小国ならライバルが少ないので、自分が何かしたいと思ったらやりやすい。また、若い人が一旦は外で働きたいと考えるのは、しっかりしたところで修行を積みたいということなのだと思うので、戻って来やすい環境を作るのも大切だろう。

舟山委員

中高生のアンケート結果を見ると、小国の良いところとして森林や河川などを挙げており、町の良さをしっかり理解していると思う。そういうところが好きな人に、選んで住んでもらいたい。雪の問題などもあるので、自分で納得して住まないといけない。

佐藤委員

学ぶところも働くところも自由に選べる時代なので、20代、30代の人の意向が重要。世代間の交流を持ち、各世代の課題のベクトルをそろえた上で、「最低限これだけは」というものを出して、覚悟を決めて取り組む必要があると思う。

安部委員

自分は家を継げといわれたが、子供たちには自分の良いようにしろと言っている。そこで小国に残ってもらうためには、小国が好きになってもらう方法を考えることが大事。そのためには、住民自身で町を活気づけることが重要。外から人が来て活気が生まれるより、住民自身が楽しみ活気づく方が良いと思う。

渡部委員

金野さんが言った「ライバルが少ない」というのが一番印象に残った。私がもし以前のまま町中心部に住んでいたら、この場にはいなかった。そういうことを考えると、適正人数というものがあると思う。「小国町」を良くしたいというのと「地域」を良くしたいというのは全然違う。「小国町」として何を指すかというメインの方針の議論がないと、小さい部会で色々な情報を集めても地域づくりは始まらないと思う。

図司委員

お話いただいたことは、根本は戻って来やすい環境や好きだと言ってもらえる方法に行き着くと思うし、そのベースとして何を指すのかということなのだと思う。

それでは、そのためにこういうことをやるべきというものを最大3つ挙げてほしい。

金野委員

仕事が確保できないといけない。環境的にここが好きという人は仕事を選ばないと思う。

起業については、ライバルは少ないが「出る杭は打たれる」ということがある。外からの人を受け入れるなら町としてのサポートが重要。

舟山委員

本当の課題は、町内に残りたかったのに出ざるを得なかった人たちや、緑のふるさと協力隊で来てそのまま定住した人たちに聞けばわかる。情報を収集すれば方向性も見えてくる。

また、地域づくりへの参加について「頼まれれば」という人が多いことについては、郡部では参加率が高い。中心部でももう少し参加率が高まり活気づけば町全体も盛り上がると思う。

出産については、産科開設は難しいと思うが、相談や医療連携などのサポート体制が大切。

あとは、自然や癒しなど、良いところをもっと PR すればよいと思う。

佐藤委員

1 点目は学校教育と起業の連携。小国町は小中高連携をやっているが、企業がどんな人材を必要としているかを教育の中で議論すべき。

2 点目はコミュニティ。地区や世代をまたぐコミュニティが少なくなっているが、そういう中に次の 20 年をどうするかという議論も出てくると思う。

3 点目は社会教育力。子供や若者に未来像を見つめさせる仕組みを作る必要がある。自分はここに住むのか、学校をどうするのかなど、自分で考えて意思決定できることが大事。

関司委員

世代の感覚は 5 年刻み位でかなり変わってきている。そういう意識で各世代と接し、それぞれの世代が持っている未来とは何なのかを話す必要があるということなのだと思う。

安部委員

会社に入った頃、町内で働いている人が総合センターで 3 泊か 5 泊かして、交流したことがあった。そういうものもあっても良いと思う。

また、小国町に残るには仕事的大事。給料をもらうだけでなく、いろいろな方法がある。そういう生き方もあるということを知ってもらうのが大事。

もうひとつは医療関係。産婦人科、小児科が 10 分～15 分くらいのところにはないのは、子供を育てていく上で大きなデメリット。

渡部委員

子供が生まれないと人は減る。子供を産む環境を整備できれば一番良い。

また、町で災害が少ないことをアピールして人を呼ぶのはどうか。

3 つ目は、学校。学校のないところに人は来ない。地域のコミュニティの基本でもある。

関司委員

事務局、オブザーバーの方からもコメントを。

山口課長

町が目指している方向が見えないとの指摘があったが、これは情報をしっかり出していきたい。また、これまで 4 つの部会で色々な議論が出ているが、最後は魅力。それをどう引き

出すかが大切だと思う。

佐藤室長

アンケートではUターンを重視すべきという意見が多かった。そのためにできることを考えて施策を構築する必要がある。もうひとつは仕事作り。アンケートでは企業誘致というのが一番多かったが、一方で地場産業の活性化という意見も多かった。町としてもそういうことを目指してきたものであり、引き続き加速化させたい。出産子育てについては、各委員から指摘があったとおりだが、全部できるものではないので、今やれることをやっていく。

廣瀬主任

仕事がないと暮らしていけない。ただ、他の部会で、仕事がないわけではなく「やりたい仕事がない」ということだという意見があった。小国町で東京のように多くの職種を求めるのは無理。そう考えると、まずは魅力づくりを重視し、それで小国が好きで戻ってきたときに仕事があるという状態をつくる必要があると思う。

渡部主任

集落の自治をもっと強固にできる仕組みを作ってはどうか。例えば地区振興協議会に自由に使えるお金を預けるなど。若い人が帰ってこないのは、地区の中で一定の役割が預けられないから。集落自治の中で役割があれば、責任感や愛着が生まれるはず。家庭の中で無理に「帰って来い」と言わなくても、地域がその役割を担ってくれると思う。

後藤課長

1 点目は職。小国の環境や生活文化を活かした研究施設を設置してはどうか。それを通じて高校と企業をつなぐ、あるいは外の人材を町内に呼び込むなど、波及効果が見込まれる。

2 点目は人と人とのつながり。中高生のアンケートでも小国の良いところとしてのパーセンテージが高い。これは、これまでに培ってきたものが継承されている証であり、小国の武器。それをベースにした安心できる暮らしというのを売りにしていくべき。

3 点目は豊かな自然環境の継承。これまで豊かな環境が保たれてきたのは、そこに生活して、自然との付き合い方がわかる人たちがいたから。人口減少の中で今までと同じようにはいかないとしても、外からの人も入れながら環境を維持していく必要がある。

伊藤所長

時代とともに、若い人が集まって何かをするということに魅力を感じなくなり、個々のやりたいことをやる時代になった。ただ、例えば地区のお祭りで若い人たちが実行委員会を作り、上の世代が手助けをするなどのコミュニケーションをとる中で、地域の課題を肌で感じていくことは可能。まずは地域の中で、一人暮らしの人がどうなっているか、除雪はどうかなど、隣組単位での声かけから課題が見えてくる。

お産については、町単独ではいくら検討しても実現しなかった。そのため、別な形でのフォーローを行っているが、浸透していないのかもしれない。

仕事については、小国では仕事＝生きがいとなるのは難しい。仕事以外でも楽しみ、生き

生きと生きている姿を見せることによって、子供たちも魅力を感じると思う。

菅野主幹

ないものをねだっても仕方がない。あるものの中から自分の手で作り出すことで愛着が生まれる。また、他人がやったことには不満が多いが、自分でやったことならば満足できるし、満足できなくても積み重ねていくことで愛着が生まれると思う。

図司委員

これまでの議論で、肝になる部分が出てきたと思う。

1 点目は出産。町で対応できないものを、広域で対応する仕組みを作ることが重要。これは観光や防災も同様で、広域連携は地方創生のキーワードのひとつにもなっている。

2 点目は仕事。東京では誰のために仕事をするのかわからないが、小国ではリアルにわかる。育ててもらった恩返しをするという意味でも、帰ってくる選択肢が出てくる。そのためにも、学校教育の中で子供たちがそれを感じられる場を設けることが大事。

3 点目は地区の取組み。地区ベースでの取組みをしながらノウハウを共有し、それを横展開するような仕組みを、役場から仕掛けても良いのではないかな。

4 点目は若者のつながり。今でも緩やかに、しなやかにつながる場面はあると思う。今の時代に合う場の持ち方を探っていく必要がある。

第4回は全体でとのことなので、クロスオーバーする部分もあると思う。重要な部分をしっかり吸い上げて戦略を策定されたい。

また、戦略は作ってからが重要。懇話会や住民にフィードバックする場を大事にしてほしい。行政の中で結論を閉じず、どうやって実現するかを住民に示されたい。

○ その他 第4回部会を10月5日に4部会合同で行うこととした。

合同部会

平成27年10月 5日（月）65

@小国町役場 大会議室

小国町地域創生総合戦略策定懇話会 合同部会 要旨

- **日 時** 平成27年10月5日（月） 18:30～20:30
- **会 場** 小国町役場 4階 大会議室
- **出席者** 懇話会委員：別紙名簿のとおり
オブザーバー：別紙名簿のとおり
事務局：山口課長、佐藤室長、小野主査、廣瀬主任、渡部主任
- **配布資料** ・策定懇話会概要
・雇用創出部会資料
・小国町人口ビジョン（素案）
・小国町地域創生総合戦略（素案）
- **概 要** ①シンクタンクみらい水野氏から、総合戦略策定の背景・意義と他の自治体の動向について解説
②各部会から、検討内容の発表と座長及び各部員からのコメント
③事務局から、人口ビジョン（素案）及び総合戦略（素案）の説明

○ 話し合い要旨

① 地方版総合戦略の策定に向けた背景・動向等について

シンクタンクみらい水野氏が、別添のパワーポイント資料に基づき、人口推計や総合戦略をめぐる国・各自治体の動向、戦略策定の目的、総合計画との関連性などについて説明した。

② 各部会の検討内容の報告

部会ごとに討議内容について報告し、座長が総括した。また、委員全員が感想などを発言した。最後にオブザーバーからコメントをもらった。各委員、オブザーバーの発言内容は以下のとおり。

<雇用創出部会から>

（柿崎委員）雇用創出部会では、どんなことをすれば雇用を創出できるかについて、各委員が具体的に考案し、それらのうち実現可能性が高いと思われるものを総合戦略の柱立てに沿って分類した。既存産業の継続的な発展支援、森林資源のさらなる活用と第一次産業の高度化、各分野の連携による山菜の販売ルートの開拓やレストランでの地元産品提供などのブランド化等が挙げられた。

（大谷委員）私は農業をしているが、自分の子供は小国から出て行くのではないかと考えていたので、真剣に話し合いに参加した。他産業の方の意見を聞くことができ、充実した話し合いにできた。

（齋藤委員）これだけ多種多様の職業の方と、総合戦略という大きな内容について話し合うこ

とができ、大変貴重な経験だった。

(猪野委員) 人口減少や後継者の問題も含めて、商売をやめる人が増えている。私の子供も含めて、小国町に戻ってくることができるのかなど、真剣に考えることができた。

(布施委員) 雇用創出部会では、各委員に自由な発想で雇用確保についての案を出してもらった。例えば、夏に農業、冬に除雪という就業形態をパッケージとして提供する「アグリスタータキット」や、付加価値の高い漢方薬用作物の栽培など。総じて見ると、自然素材の宝庫という特色を生かした原材料供給基地としての展開が見込まれる。企業誘致という考え方もあるが、小国町に来る必要性があるかがポイント。

一方で、雇用を創出するということは供給側の理論。働きたいが希望職種がないという課題がある。この町に住みたいから町にある仕事に就くのか、この仕事に就きたいから町を出るのか。私としては、この町に住みたいから仕事を創るという発想が必要。

<人の流れ創造部会から>

(山口委員) 1 回目は自己紹介と小国に対する思いを話し、2 回目にアンケート結果や総合戦略についての説明を受けての感想などを話した。それをもとにして 3 回目にそれぞれの提案を持ち寄り、検討した。

医療関係に興味がある中高生などに体験してもらう「オープンホスピタル」や、天然のかき氷、町営バスが来るまでの待ち時間を活用した交流、イベント団体の架け橋になる団体の設立、老人ホームやグループホームの増設、大学生などのワークショップで作るアスレチック、道の駅と総合センターの合体、大学生が除雪や農作業を体験する仕組みの創出、データセンターの誘致、コミュニティビジネスの仕組みづくりなどが提案され、それらの実現可能性について検討した。

提案が、1 つでも 2 つでも実現できれば良いと考えている。

(山中委員) この部会では、自分自身の体験からスタートして、様々な提案をしてもらった。今住んでいる住民自らが、かつて小国を経験したことがある U ターン希望者や、住んだ経験はないが小国を好きな人たちのファンクラブ、経験したことがない I ターン者などの人の流れを作るコアになる仕組みを作ることが重要。住んでいる人が活動していない町に、魅力はないという結論に至った。

(舟山(和)委員) 士気に満ちた方々と話しをでき、本当に楽しかった。小玉川青年団いちころで活動をしているが、他にも小国でイベントを行っている団体は多く、それらの連携をとることができればもっと面白いと思う。

(安部委員) 自分の若い頃を振り返ると、地区のことを深く考えて古田歌舞伎の活動に参加したわけではないが、活動を進めるうちに地域に対する意識が芽生えてきた。去年、1 人の高校生が一生懸命頑張っている姿に心打たれた同年代の方が 5 人、6 人と参加し、新しい人の流れが生まれた。自分たちで何かをやろうという気持ちが重要。

(安部(隆)委員) この部会に参加し、経験豊富な大人の方と話す中で、自分の考え方も変わっ

てきた。人のつながりというものを知ることができ、また小国の良さを知ることができ、良い経験になった。

(舟山(玲)委員) 自分では想像もつかないような意見を皆さんから聞けて、大変勉強になった。そうした情報を発信できる人材になりたいと思った。

<結婚・出産・子育て部会から>

(工藤委員) 1回目の部会で、宮原先生から人口減少や県の動向などについて話を聞いた後、思っていることをすべて付箋に書いて張り出し、2回目で具体的にどうすれば良いかを検討した。SNSの活用、FMラジオ局の開設、ご当地の魅力発信、子供がいる家庭へのサポートシステムなどの意見が出た。3回目には、結婚・出産・子育てだけではなく、町の魅力全体をアピールすることや、住民自身が健康でいられることの重要性について話し合い、他の部会で検討している内容と深い関係があることを感じた。また、町でやっている取り組みを意外と知らないという意見もあった。

(宮原委員) 小国で結婚・出産・子育てを増やすには、住んでみたい、訪ねてみたいと思ってもらう必要がある。そのためには、小国の人がみんな心身ともに元気で笑い声がいつも聞こえてくるという町をつくっていくのが、一番説得力がある。町が魅力をもつということは、町の人一人一人がいくつになっても元気であるということ。それには、4つの部会で話し合った内容がバランスよく重なり合って、実践されていくことが重要という結論になった。

(今委員) この部会に参加する前に置賜広域事業の婚活にも携わっていた。魅力のある町にしていけないと、出会いも生まれえないと思った。楽しいまちづくりに向け、自分でも企画を立てていきたい。

(河内委員) 結婚・出産・子育てをひとくくりにして考えるのは難しいと感じた。出会うための環境、出産のための環境、親としての環境は違う。いずれにしても、小国に目を向けてもらえなければ何も始まらないと感じた。

(金委員) 何も知らないまま部会に参加したが、やっているうちに楽しくなった。多くの人の意見を聞けて、大変勉強になった。それらをどう活かしていったら良いか考えながら、小国の役に立っていきたい。

(舟山(咲)委員) 自分の考えを声に出して伝えることで、打ち解け合えた。中学校の頃、小国に貢献するにはどうしたら良いかという学習をやったことがあり、そこで思っていたことを今回伝えることができ、良い経験になった。小国についてよく考えるきっかけにもなった。

<地域創造・暮らし安心部会から>

(佐藤(靖)委員) 図司先生の提案で、1回目の部会で10年後の自分について想像し、2回目にその振り返りとアンケート結果から見えるものを討議した。3回目はテーマに沿って課題を深めた。「医療、出産、防災など、町だけで解決するのが難しい課題については広域連携

によって対応したら良いのではないか」「就業・雇用場や起業については、どういう人材が必要か、学校教育と企業が腹を割って話し合ったら良いのではないか」「各地区のイベントや活動の連携をとる必要があるだろう」「若者のコミュニケーションの場を確保することが重要」という4点の課題が抽出された。

町を形成していこうとする若者が未来を見ることが出来る展開こそが、本当の意味での地域と暮らしを作り上げていく一番のファクターであるとまとめたところ。

(渡部委員) 一番感じたのは、皆さんが色々な考えを持っているので、それらをひとつの方針にまとめ上げるのは大変な作業だということ。地元の本当の意見を取り入れてもらえるのはありがたい。先ほど水野さんが話された人「幸」創生という考え方でいけば、自分たちの楽しいと思うことをやっていけば無理せずとも人は来るのではないかと思った。

(金野委員) テーマが大きく、どのように考えれば良いか悩んだが、部会では地域行事や自分の仕事を子供にどう伝えるかといった身近な話しが出た。そういう個人的な、具体的なものが一番実現性の高い部分だと思うので、そういうものを応援する計画にしてほしい。

(舟山(靖)委員) アンケートで若い人たちが町に愛着を持っているという結果が出た。これは嬉しいこと。一方、現実として人口が減る中で、漠然とした不安を抱えて生活している人も多い。不安を良い方向に変えて、小国町が発展していくための活動に参加していきたい。

(山口課長) 部会の最後に、岡司先生から「戦略は作ってからが重要。懇話会や住民にフィードバックする場を大事にしてほしい。行政の中で結論を閉じず、どうやって実現するかを住民に示されたい」とのコメントをもらったところ。

<オブザーバーから>

(後藤課長) それぞれの地域、家庭、職場などで日頃思っていることからの視点でとりまとめが成されたことは、非常に貴重なものと受け止めている。

(阿部事務長) 3回の話し合いというのは時間が足りなかったのではないかと感じた。大変色々な意見をいただけた。

(伊藤所長) かつて社会教育で若い人たちが集まる場を設けたが、今回、それが大変良かったという声が聞かれた。今後、そういう機会があればぜひ協力をお願いしたい。

(井上課長) 部会では面白い発想が数多く出された。こうした話しで盛り上がることで自体が有意義。今後もこうした場を継続的に作れればと感じた。

(菅野主幹) 小国町に対する皆様の熱い思いを感じた。生活水準が上がると不平不満が増えてくるが、歳をとっても自分でがんばる方も多い。やる気を起こさせるような地域づくりに向けて取り組みたい。

(仁科主幹) 交付金や人口をどう奪い合うかという議論になっている。外部の人や住んでいる人の意識や気持ちの流れをどう小国町に向けるかという議論が重要だと感じた。

(加藤次長) 部会では高校生2名から、しっかりとした意見を聞くことができ、行政では思いつかないような発想もあり、楽しかった。

(舟山事務局長)雇用創出部会は、小国の水を使ったクアーズの地ビールという話しから始まって、大変面白い意見をまとめていただいた。高校生からも「これからの小国を背負っていく」という覚悟も聞けた。これからもがんばってほしい。

(舟山主幹) 地域づくりの目的は豊かさを求めること。皆様方の意見を聞いて、これからは精神的な豊かさの時代だと感じた。

(原田課長) 様々な出産・子育ての支援をしているが、出生数は減っている。施策の情報が求められているのに、皆様に伝わらない現実がある。発信のあり方について考えていきたい。

(野澤会計管理者) 地域の皆様の貴重なご意見や、高校からのしっかりした考えを伺うことができた。これからもご協力をお願いしたい。

③ 人口ビジョン（素案）及び総合戦略（素案）について

小野主査から人口ビジョン（素案）について、佐藤室長から総合戦略（素案）について説明した。記載の過不足や修正意見について、翌週末（10月16日）を目処に事務局まで連絡していただくこととした。

策定懇話会

総括

○雇用創出部会 座長

山形銀行小国支店長 布施 和宏 氏 71

○人の流れ創造部会 座長

新潟県立大学教授 山中 知彦 氏 72

○結婚・出産・子育て部会 座長

(有)地域環境デザイン研究所長 宮原 博通 氏 74

○地域創生・暮らし安心部会 座長

法政大学教授 関司 直也 氏 75

小国町地域創生総合戦略策定懇話会参加に際しての所感

山形銀行小国支店長 布施 和 宏

懇話会概要の趣意説明をいただいた当初、普段、金融・銀行業務に浸りきっている自分自身を客観視した時に、ファシリテーターとしては役不足ではないだろうか、という懸念はかなりあった。しかし、当ワーキンググループのメンバーから個性豊かな意見を活発に発表していただいたおかげで一応の「まとめ」に辿り着くことができたのではないだろうかと半分自負している。メンバーのみなさまには本当に感謝の言葉しかありません。

当ワーキンググループのテーマ「雇用の創出」であるが、横断的に様々な職種・立場からのアプローチにより、お互いが想像できないような発想や提案を聴くことができ、たいへん有意義な意見交換の場であった。また、「雇用を創出するにはどうしたらいいか？どんな産業や事業を興したらいいか？」という主命題を議論していくと、「供給側の理論＝計画策定側の理論」となりがちになることにも気付かされた。そうした上で「需要側＝求職者あるいは新規就業希望者」の視点から見えてきた、求人と希望職種のミスマッチの問題や子育て・介護支援等の雇用を取り巻く諸問題にまで議論を発展させ、命題をある程度深掘りすることができたのではないかと考えている。

私たちのワーキンググループには高校生は参加していなかったが、最終回の合同懇話会においては他グループの高校生の意見を聴くことができ、新鮮な思いがした。彼らの発想には興味あるものが多く見られ、頼もしく思われた方も多かったのではないだろうか。しかも、若い人たちの意見に耳を傾けることで彼らに当事者意識や行政への参画意識が芽生えるだけでなく、彼らにとっても合意形成のプロセスを学ぶ場としても有効だったに違いない。来年の参議院選挙から18歳以上に選挙権が与えられるが、「感覚」を磨くためにも小国町のこれからのためにも、今後もこういった機会の場には是非若い人を誘っていただきたいと切望する。

「人の流れ創造部会」をふり返って

新潟県立大学教授 山 中 知 彦

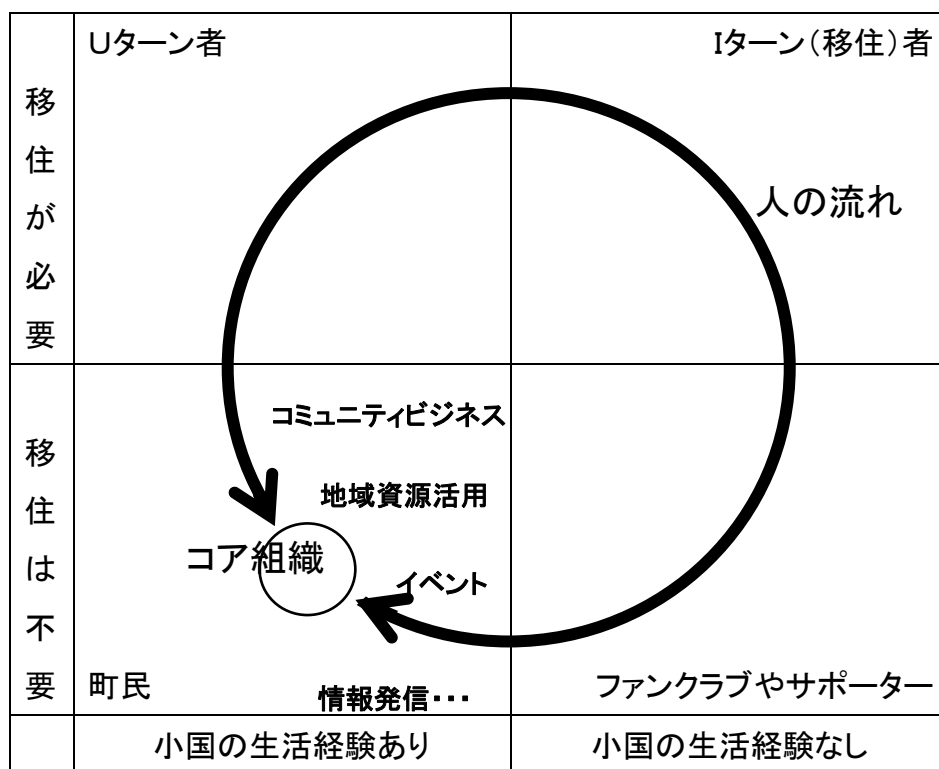
1回目から2回目の頭にかけての話し合いは、メンバーがフラットで親密な関係を築くために、各々の経験を披露しあい、共有部分を探ることから始めました。その結果見えてきたのは、それぞれがふるさと小国への思いを自覚するきっかけが、身近な人とのつながりから発しているというごく当たり前の事実でした。一方で、小国町の中で動いている人どうしのつながりは、それほど緊密ではなさそうだということも見えてきました。声高に「移住促進」を唱えるよりも、まずは町の中の人をつなかりを緊密にして、そこから少しずつ外に広げていくのがよさそうだというのが、スタートだったように思います。

2回目に事務局から住民アンケート結果や町の計画の説明を受けた後の話し合いでも、人の流れのコアになるのは小国の町民で、徐々にファンクラブやサポーター～Uターン者～Iターン(移住)者へと波及させていくのがよさそうだという考えが深められ、具体的な提案も出て盛り上がりました。山口さん差し入れの手作りクッキーが効いたようです。そこで、次回に向けて、各自が提案をまとめるという宿題を出しました。

3回目に提出された提案は、5人それぞれの個性が反映した秀作ぞろいでした。佐藤君からは、中高生のアンケート結果を読みこんだ「小国病院でのオープンホスピタル」という高校生とは思えない秀逸なアイディア。同じ高校生の船山怜奈さんからは、「天然氷で町おこし」など地域資源をとらえる瑞々しい感性。船山和樹さんからは、「町民イベント団体の橋がけ」をはじめとする実現可能性のあるコミュニティビジネス。山口さんからもOGN(小国を元気にするネットワーク)を強化した実体験に即したコミュニティビジネス。安部さんからは、雇用面・地元活性面・娯楽面それぞれからの多面的な事業提案と客観的な事業評価のフレーム。

3回にわたる5人の話し合いを模式図にしてみたのが下図です。

4回目の合同部会では、他の3部会でも活発な話し合いが行われていたことが確認でき、小国町民の力を実感することができました。



部会活動の振り返り

(有)地域環境デザイン研究所長 宮原博通

今回の小国町地域創生総合戦略策定懇話会における「結婚・出産・子育て部会」は、3回という極めて少ない時間ではあったが、この部会のテーマについて、多様な角度から多岐にわたる意見が出されたことは大変有意義であったと考えます。

それはメンバーが、高校生をはじめ社会の中でのポジションが多岐に亘り、また女性の参加も多く、ディスカッションを行う上でより効果的であったように思います。

「結婚・出産・子育て部会」では、部会の趣旨に則りディスカッションを展開するものの、究極は、居心地の良い、活力に満ちた“まち”づくりにつながっていくという認識の上に立ち、多様な角度からアイデアが出されました。

そのひとつである、FM放送局の開設なども地域のコミュニティづくりに貢献するものとして、今後大いに期待が寄せられるものであらうかと思えます。

また、この部会活動においてディスカッションしたことをメンバーそれぞれが各々の所属機関に対し、共鳴共感の場づくりとして、の活動成果の報告会などを開催し、実践的な展開に向けてのきっかけづくりをされることが望ましいと考えます。

町が積極的にこのようなアプローチを仕掛けていくことは、いずれ協働のまちづくりへの展開に功を奏するに違いないと思われます。

今回は、国の総合戦略における4つの「基本目標」に対応する形で4つの部会が組まれたわけですが、4つの部会はそれぞれに関係し合っていることから、“共通の社会基盤づくり”という視点で、もう少し議論を深めたい気がしました。

つまり、その社会基盤といえるものこそ、第4次小国町総合計画の実現に向けて土台となる部分であると思えます。

とりわけ、小国町の持つ自然資源、社会資源の活用とそれに伴う地域コミュニティの維持形成は、社会基盤構築の根幹をなす部分であり、この部分の全町一体となつての共鳴共感づくりが小国町に真の豊かさをもたらすものであると信じています。

町民が「自分ごと」に落とし込める総合戦略を

法政大学教授 図 司 直 也

懇話会の「地域創造・暮らし安心部会」の座長を務めさせていただきました図司です。まず、大学等での所用のために、部会自体には第2回、第3回の2回しかお伺いできなかったことをお詫び申し上げます。その点で、私自身、委員の皆さんともう少し腰を落ち着けてじっくりお話したかった（できれば夜の懇親会でのお付き合いまで）点が悔やまれております。

それでも、委員の皆さんからは意見を闊達に出して頂き、大変有り難く進行をさせて頂きました。初回には、いきなり町レベルの議論を始めるのは大変だろうということで、まずは自分の身の回りから将来のことを考えるべく、自分の家族構成を描き出してもらい、10年後、つまり家族が皆10歳、齢を重ねた時、家族は、集落は、町全体はどうなっているか、また、どうなっていて欲しいか、を考えて頂きました。

そうすると、委員それぞれの個性も反映しながら、「自分ごと→家族ごと→集落ごと→地区ごと…」というように、具体的な将来への期待や課題が率直に語られたように思います。それを受けて、第2回では、5つの主体（高齢者／現役層／子育て層／若者層（子供たちも含めて））に分けながら、暮らしの中で感じている不満や、将来的な不安、それに対する手立てについて議論を深め、第3回にも繋げていきました。

結果として部会から提起された論点としては、「子どもを産める環境づくり」、「仕事（働き方）」、「各地区での取り組みの共有」、「若者同士の集う場づくり」というものでした。挙げた項目を目にすれば、これまでの総合計画でも掲げられていたものばかりのようにも見えてしまいます。それでも、今回の懇話会での議論の積み重ねからすれば、委員の皆さんから寄せられた現場の生々しい様子や実感にこそ、その本質が体现されていると言えるでしょう。

その点で、この総合戦略が固まった暁には、その内容を委員の皆さんはもちろんですが、町民の皆さんのところまで、どのような形で届けていくのかが、かなり大事になってきます。まさに、国が音頭をとった「まち・ひと・しごと」の政策枠組みが、一体、小国町における暮らしにどのように関わってくるのか、また、その中で、町民それぞれがどのような役割を担っていく必要があるのか、国から小国町へ、さらには「地区ごと→集落ごと→家族ごと→自分ごと」へと落とし込んでいける場づくりが求められます。（総合戦略を住民に伝える場のアレンジを工夫すべく議論を始めている

地域も出てきています。)

小国町における地方創生は、まさにこれからスタートを切ろうとしています。短期間でありながら熱心な議論の上にまとめられた総合戦略に、町民の皆さんの熱い「魂」が込められ、ひとつでも具体的な形が実現していくことを期待し、私も今後の展開を見届けていきたいと思っています。